
モンスターハンター 火竜繚乱

黒蛙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター 火竜繚乱

【Nコード】

N3963Q

【作者名】

黒蛙

【あらすじ】

巨大な獣や竜が闊歩する世界。

人はその影に隠れひっそりと生活をしていた。

しかし、あえてそれらを狩猟する者達が居た。

人は彼らを「ハンター」と呼ぶ。

ジャックとリズィの二人もまた、そんなハンターの端くれ。

今日も得物を担ぎ、未開の大地を駆けるのだ。

二人のハンターを中心にストーリーを展開していきます。

出来るだけ原作を崩さないようにしつつ、それに囚われない作風を目

指してます。
シリアス色強し。

1章 (1) (前書き)

はじめまして、初投稿です。

各種固有名詞を使っていますが、MHG〜MHP2Gまでの世界観で書いているつもりです。

独自の解釈を入れてる部分も多いので原作と違う！ってのも多いかと思いますが、

生温かい眼で見ただけだとありがたいです。

1章 (1)

「イヤンクック討伐う？」

人目を憚らず、不満そうな声をあげたのは、カウンターの前に立つ一人の男。

その背では彼の身長よりも大きな一振りの大剣がずっしりとその存在をアピールしている。

彼の胴、腕、足、体の各部分で赤褐色に鈍く光るスケイルメイルがカチャカチャと音をたてる。

この街の誰もが、おそらく小さな子供ですら彼の職業をピタリと言いつけるだろう。

「ハンター」と。

ハンター、一言で言えば大型のモンスターを主な目標とした狩人、といったところである。

新人のハンターは一般人では危険な沼地へとキノコの採取へ出かけたり、

比較的大型の動物の毛皮を取ったりと、半ば何でも屋に近い仕事をするが、

中級からベテランになると飛竜と呼ばれる大型のモンスターの討伐が主な目標となる。

そして大剣を背負った彼が叫んだこの場所が、そのハンター達が依頼を受けるハンターギルドだ。

内装は酒場そのものであるが、店内にはハンターの必需品である砥石や回復薬といった備品売り場もあり、

さらにカウンターでは料理や酒に加えて情報の提供、また依頼の受付も兼ねている。

「クック討伐とか、新人に毛が生えたような奴にやらしときゃいいだろ。」

そのカウンターを挟んで受付嬢と向かい合う男は火竜の鱗で作った

籠手をカチャリと鳴らし、拳を握り締める。

「俺にはもつとこう、カーツ！つと熱く、それでいてドバーツ！つと報酬が入ってくるようなそんな依頼があるだろ？」

「他の依頼もあることはあるんだけどねー、是非あなた達にやってほしいのよー。」

頬に手を当て、困ったような笑みを見せる受付嬢。名をマリアアという。

「単独討伐に向かった中級が1人、チームで向かった同じく中級が3人。返り討ちにあっちゃってるのよね。」

そういつつ、カウンターの下から4枚の紙を取り出す。

クエストに失敗したという4人の詳細がそこに記してあった。

「最初の一人が大剣使い。次のパーティーが、ランス、双剣、狩猟笛ねー。特に3人組の方はリオレウスの討伐にも何回か成功してるから、ギルドの方も慎重になってるみたいなのよー」

「なるほどねえ……」

出された4枚の紙へと視線を落とす。

4人の装備する武器、防具どちらもそれほど悪い物ではない。

特に3人組みの1人の持つ「双剣リュウノツガイ」は双剣の中では上級に当たる。

彼が見る限り、到底イヤクツク程度に負ける要素は無いように思える。

もつとも、ハンターに絶対は無い。負ける可能性もゼロではないが、そんな事を考えつつ、彼はちらりとマリアアの奥にある大きな盾に視線を向けた。

「ギルドが危険視するならマリアアが行ったほうがいいんじゃないか？」

「駄目よー。私の得物はクツクちゃんとは相性が悪いのよー？ジャツクくんも知ってるでしょー？」

彼女は「鋼のマリアア」の異名を持つ名うてのハンターでもある。

その由来は人間要塞とも言えるガンランスを得物としているところ

からきている。

内部に砲撃機構を備えた槍、それがガンランス。その大きさ故にすばやく動く事が出来ないため、大きな盾を持ち敵の攻撃を防御する。

彼女の大盾捌きはまさに鉄壁と言えた。

とはいえ、連続で攻撃を受ければいくら大盾といえども防ぎきれなくなる。

ガンランス使いにとって一番恐ろしいのは連続して攻撃をされることなのである。

そしてイヤクツクは頻繁にその連続攻撃を行ってくるのだ。

「あなた達を見込んでのことなのよー？報酬も弾むわよー？」

その言葉に今まで無反応だった人影がピクリと反応した。

ジャックに隠れるような位置に立っていた小柄な人影。

赤褐色の防具を装備する彼とは対象的に、彼女は深青の防具を装備していた。

彼の装備する防具とはつくりが大きく異なり、主に体の左を厚い鱗や甲羅で堅め、右側は動きやすいように軽装になっている。ガンナーの装備に良く見られる形状だ。

実際、彼女は小柄な体に不釣り合いな大きなヘビーボウガンを折りたたんだ状態で背負っていた。

「……いくら？」

「1人頭5000ゼニーよー。クツク討伐としては破格だと思うわよー？」

「……もう少し」

「そうは言ってもねえ…ギルドも慈善事業じゃないのよー？」

「…他に受けそうな人は居るの？」

「……んもー、相変わらずリズイちゃんは交渉上手なんだからー。6500、捕獲できたら追加で1000出すわー。これが限界よー？」

短い茶色の髪を僅かに揺らし、リズイと呼ばれた少女がコクンと頷

く。

「ありがとう」

「いいえー、それじゃいつも通りにこの紙に」

「ちよつとまてええい！」

クエスト依頼書へと羽ペンを伸ばしていたリズイがその腕を止める。

「俺はまだやるって言ってねえぞ。勝手に決め」

「……青レウスの逆鱗」

視線は変わらず依頼書へと落としたまま、ぼそつと何気ない風になりズイが呟く。

その言葉にジャックはうつ、と声を詰まらせる。

「い、いやあれはメラルーの奴がだな……」

「……ソウルスパルタカス」

うう、たじろぐ男。

「欲しかったな、ソウルスパルタカス」

「……」

「……あ、ごめん、何か言った？」

ここで初めて、リズイはジャックへと視線を向けた。無表情で。

「……なんでもない」

カウンターの向こうではマリーアがカラカラと笑っていた。

1章 (2)

「居たな」

大きな岩の割れ目からこつそりとその奥を覗き込む赤いヘルムの男。背負う大剣「蒼剣ガノトス」の柄を確かめるように握り締めた。滑り止め用につけている革の指貫グローブの下の手のひらがかすかな湿り気を帯び始めていた。

「……大きい。」

割れ目の逆側、大きなボウガンを背負った少女が同じように覗き込む。

彼女もまた頭に防具をつけているが、男の装備とはまた方向性が大きく違っている。

男は頭全体と口元を守るように作られた重装タイプ。

少女のそれは鱗などで補強されてはいるものの、ヘルムというよりは帽子に近かった。

実際、柔軟性が高く頭のみを守るもので視界は良い。ガンナー向けの装備ともいえた。

そんな二人の覗きこむ先はちよつとした広場になっており、崖をよじ登れば飛竜の住処とされる事が多い洞窟へと抜けられる場所だ。

そこを羽毛の代わりに桃色の鱗をまとった鶏のような、そんなモンスターが

のんきにあくびをしながら悠々と歩いていた。

「ある程度は予想してたけどよ、予想以上の大きさだな」

「…金冠ってレベルじゃ無い」

ハンター達の主な討伐目的となっている大型モンスター、飛竜と呼ばれるそれらは大きさによって金冠、銀冠と呼ばれる等級が付けられる。

二人が様子を伺うように観察しているあのモンスター、イヤンクツクの体長は通常9M～10M。

大きいものでも11M程度なのだが、二人はそれを大きく上回るサイズだと目算する。

赤ヘルムの男、ジャックが狩用の各種備品をいれたバッグから双眼鏡と取り出し再びクックを見る。

「参ったな、俺の剣届くかわかんねえな」

その特徴的な耳を閉じたり開いたりしながら、クックはクケケケと泣き声を上げる。

暫くはその場から飛び立つ事はなさそうな気配だ。

双眼鏡をずらし、自分の目でも確認する。

そのまま双眼鏡をリズィへと投げると、彼女もまた同じように双眼鏡を覗き込み大きさを測っているようだ。

「…私は問題無い」

「そりやお前はガンナーだしな。しかしどうするよ？ちよっとまともなサイズじゃねえぞ。」

「…やることは同じ。クックはやっぱリクック」

リズィの視線はクックへと向けられたままだが、慣れた手つきで腰につけた道具袋へと双眼鏡をしまい、代わりに灰色のこぶし大の球体を取り出す。

「ま、そりやそつか。んじゃ行くぞ」

ジャックは再び右肩から伸びる柄をぐつと握り締め、リズィは灰色の玉を握り締めたまま、二人は岩の向こう、イヤンクックの居るひらけた場所へと躍り出た。

蒼と赤のスケイルメイルがカチャカチャとやかましく音を立てる。

イヤンクックの多きな耳が、ピクツとその音を聞きつけて開く。

そしてすぐさますでに疾走状態に入っている二人の方向へと向き直った。

首を持ち上げ、耳を開き、翼を大きく広げ相手を威嚇するように大きく、大きく見せる。

普段はどうとも思わないその威嚇ポーズであるが、ゆづに15Mは超えそうなその巨体故に威嚇もまんざらではないように二人には見

えた。

(…くる)

(気合入れてりゃクツクの咆哮くらいは何とかつ!)
赤と蒼、両者ともクツクとの戦闘経験は豊富だ。
威嚇とともに、甲高い声での咆哮をしてくる事も予定の範囲内である。

飛竜の咆哮はその音量、音質ともに近距離でまともに聞いてしまうと暫く眩暈がするほどに強烈なものだ。

しかしながら、飛竜の中ではサイズの小さいイヤンクツクの咆哮はそこまで強烈なものではなく、ベテランのハンターであれば、不意でない限り文字通り気合でどうにかなるレベルである。

がしかし、二人の目の前で今まさに咆哮をしようとするこのイヤンクツクは、体のサイズとともにその咆哮すらも予定の範囲から飛びぬけていた。

クケエエエエエエエエエエ!!!

ビリビリと大気が振るえ、大型の飛竜の放つそれにも匹敵する音量の咆哮が二人を強襲する。

「!」

「なっ!」

柄に手を伸ばしていたジャックは咄嗟に両手で耳をふさぎ、ギリギリ「気合で何とか出来るレベル」に抑えたが、灰色の球体を持つていたリズイは間に合わなかった。

「うっ」

しまったと思ったときはもうすでに遅い。

空気の波は彼女の両耳から脳へと体の内部から決定的な打撃を与えていた。

彼女の足元がふらつく。

飛竜の咆哮をまともに聞いてしまったハンターの末路は想像に難く

ない。

「リズイ！」

二人の正面には体を低くかまえ、体当たりをするべくクツクが迫ま
っている。

(間に合わないかつ…！)

ジャックの脳裏に無残に吹き飛ばされる蒼の装甲が一瞬浮かぶ、が、

キイイイイイン

耳鳴りの様な音が広場へと響き、その高音に濁流の如き突撃をして
いたクツクがたたらを踏んだ。
音爆弾。

爆弾の一種で、鳴き袋と呼ばれるモンスターの臓器を火薬で粉碎す
ることで人の可聴領域外の爆音を出す道具だ。

リズイの持っていたその灰色の音爆弾がクツクのほぼ目の前で炸裂
したのである。

咆哮の直撃を受ける直前、危険を察知したリズイもまた何もしな
かったわけではなく、手に持っていたその音爆弾をイヤンクツクへと
向けて投げつけていた。

そのままでは距離的に届かなかったであろうが、イヤンクツク自ら
が走りこんできたためにタイミングよく目の前で炸裂したのだ。

大きな耳を持つイヤンクツクはその外見の通り、大きな音に弱い。
イヤンクツクは自分の放った咆哮を逆に食らったような状況になっ
たというわけだ。

薄ピンク色をしたその巨体がふらついている間にジャックはリズイ
を飛びつくようにして抱きかかえる。

リズイを抱えたままゴロゴロと地を転がり、イヤンクツクの左側へ
と回り込んだ。

「なんてやるうだ…まるでディアブロスの咆哮じゃねえか」

小柄な体を抱きかかえたまま目を回す巨体へと恨めしそうに視線を

向ける。

と、彼の胸の辺りが下からグツと押される。

「…もう、大丈夫。助かった、ありがとう。」

自分を抱えるジャックを押しつけるようにして何事も無かったかのように彼女は立ち上がった。

そして彼女もまた彼と同じく視線を向ける。

「…多分、前の4人もあれに」

ジャックも立ち上がり、無言で頷く。

あちらも音爆弾の余韻から復帰して、ぶるぶると頭を左右に振っている。

クアツフツ！クアツフツ！

と荒い鳴き声を上げ、特徴的な嘴の隙間から炎をチロチロと覗かせるクック。

「来るぞっ」

「ん」

掛け声と共に左右へと展開する二人。

二手に分かれた赤と蒼、クックも一瞬戸惑う様子があったものの、すぐに目標を定めた。

「よっしや、きやがれ」

クックの視線が向かう先は赤の鎧に身を包む大剣使い。

先ほどと同じように姿勢を低くし突撃の構えだ。

対するジャックは大剣は背に収めたままクックの右側へと回りこむように移動している。

威力は高いが、その分隙の大きな大剣は一撃離脱を基本戦術としている使い手が多い。

ジャックもまた例に漏れず、相手の隙を誘いそこへ強烈な一撃を見舞う一撃離脱を得意としていた。

そのジャックの誘いにのり、クックが体当たりを仕掛けてくる。

猛烈な勢いで走りこみ、その巨体で相手を押しつぶす、単純にして強力な一撃。

しかし単調なその動きを曲りなりにもベテランハンターに名を連ねる彼が避けるのは造作も無いことだった。

衝突の直前、クツクの進行方向と直角に飛び込み前転。

目標を見失い止まろうとするクツクだが、突撃の勢いを殺す事は出来ず足がもつれるように倒れこんだ。

そこへ1発の砲撃音。

クツクの後方、背負っていたヘビーボウガンを展開したりズイがその発信源だ。

彼女の放つ指3本分にもなる巨大な銃弾がクツクへと飛来する。

続けて2発、3発と連射。

すべての銃弾は吸い込まれるようにクツクの左翼へと向かう。

貫通弾と呼ばれる先端を限りなく鋭利に研磨した銃弾は、刺さる事なく翼を切り裂いていく。

さらに、右側にはクツクの突撃をかわしたばかりのジャックが、その背の柄へと手を伸ばしていた。

「どおおおおおおりやあああああああ！」

肩を支点にテコの原理を利用した、抜刀斬りと呼ばれる大剣独特の動作で重厚な刃を振り下ろす。

ガノトトスの鱗で作られたその大剣は衝撃に反応し極寒の水を鱗から噴出する。

その水が刃となりクツクの翼膜の部分を大きく切り裂いた。

クゲエエエエ！

両翼を切り裂かれたクツクが喉の奥から苦痛の声を張り上げる。

(まじいつ！)

大剣を振り下ろしたジャックは、その振り下ろす勢いをあえて殺さずその超重量に流されるように地を転がる。

と、彼の頭上を丸太のようなクツクの尻尾が轟音を上げて通過した。彼の鎧はリオレウスの鱗を張り合わせた強力な物ではあるが、あの一撃をまともに受けられただでは済まない。

あたりを飛び回っていたランゴスタがその一撃の巻き添えを受け、

乾いた音を立てて四散した。

バラバラとランゴスタの甲羅が飛び散る中、地を転がりつつ下から覗き込むような視点でクツクを視界に納めるとその奥、崖の上でリズィが次弾を装填している姿が見えた。

クツクの尻尾の届かないあたりまで距離をとり、ジャックは立ち上がる。

相手の次の行動に備え、超重量を誇る大剣を持ち上げる。

しかしクツクの行動の方がわずかに早かった。

ジャックはクツクに対しサイドへと回り込んでいたが、クツクは素早く方向を転換し下あごが大きく突き出したこれまた特徴的な嘴を素早く打ちおろしてくる。

「ちっ」

通常のクツクよりも格段に大きなそれは回避するには少々時間が足りなすぎる。

咄嗟の判断でジャックは大剣の腹で巨大な槌のような一撃を抑えた。

（洒落になんねえぞこれは）

攻撃を受けるたび、ガン！という轟音と共に体ごと持っていかれる程の衝撃が腕を伝う。

両足に更に力を込め、吹き飛ばされそうになる体を抑えた。

爪や牙による斬撃と違い、尻尾や嘴による打撃は鎧の堅さや厚さなどさほど問題にしない。

いくら重装備で身を固めてもそのダメージの多くは直接本人へと伝わる。

（これは…ランス使いにや厳しいか）

ハンターが用いる武具の中で最も防御に適しているものがランスだ。といっても、ランスそのものに防御能力があるわけではなく、セットとして使用される大盾が城壁とも言われる防御力の源だ。

上質な大盾はリオレウスの火球すらも防ぎきる。

しかし、ランスに加え大盾がセットという大剣をも上回る超重量武器であるが故に、構えたままでは殆ど移動が出来ない。

そこで、多くのランス使いは重い鎧に身を固め、攻撃を受けきる戦い方をする。

大盾と厚い鎧が彼らの生命線だ。

ところが、このクックはガードの上からでも確実にダメージを蓄積させてくる。

実際失敗した3人組のうち最も早くに脱落したのは、本来最も高い防御力を持つはずのランス使いだった。

(マリーアが嫌がるわけ…だなっ)

ガン！ガン！とクックの連続攻撃。

強靱な首を使い、2回、3回と巨大な嘴の鎚を振り下ろす。

その度に攻撃を受けるジャックの大剣からは火花が飛び散り、刃が欠けていく。

連続して伝わる衝撃に手に痺れが生まれ、握力が徐々に落ちてくるのがジャックにも分かった。

(くそっ、防ぎきれねえ)

4回目の打撃を繰り返そうと首を振り上げるクックに、ジャックが舌打ちをした直後、クックの耳が爆発で吹き飛んだ。

耳元での爆発音と衝撃に再びクックがよろける。

その隙にジャックは大剣を背に納め距離を取った。

後方では再びリズィが砲弾の装填を行っていた。

装填する砲弾は榴弾と呼ばれる種類の砲弾だ。

砲弾そのものに爆薬を仕込み、着弾と共に爆発し至近距離からの爆発でダメージを与える。

爆発のダメージは外殻の硬さをあまり気にせずにダメージを与えられ、多くの飛竜に有効という特徴がある。

更に、クックなどの音に弱いものに対しては、先刻の音爆弾の様に爆発音でひるませる事も可能だ。

砲弾そのものが大きく、砲撃の反動も大きいがその分効果も高い。

リズィの使うヘビーボウガンは一般的に軽量化されているライトボウガンよりも扱いづらいといわれるが、こうした反動の大きな砲弾

を使う場合、銃身そのものの重さが反動によるブレを抑えてくれるため、

ライトボウガンよりも命中精度が高い場合がある。

女性の、その中でも小柄なりズイが体に似合わぬ巨大なヘビーボウガンを愛用する理由の一つがそれだ。

己の拳ほどもある砲弾を慣れた手つきでボウガンへと装填する。

ジャックが狙われている間に出来るだけ大きなダメージを与えておく、それがリズイの大きな役割だ。

彼の扱う大剣は絶大な破壊力がある。

しかしそれと比例するように攻撃の前後の隙も大きい。

元気いっぱい走り回る飛竜相手では当然リスクも大きくなる。

それ故に、早い段階でリズイがダメージを与え、動きが鈍くなったところをジャックが一気に叩く。

ペアを組むようになってから、知らず知らずのうちに形作られた二人の必勝パターン。

砲弾を装填したリズイはまるで狙っていないかのような速度でよけるクックへと照準を合わせ、引き金を引く。

貫通弾を撃つたときよりも更に大きな砲撃音が響き、今度はクックの足元が爆発した。

クアアアア！

クックの足は体の割りに細い。

堅い鱗で覆われた足は剣では弾かれてしまうが、榴弾の爆発はその堅さをもるともせず大きなダメージを残す。

足へのダメージに体を支えきれないと判断したのか、クックは翼を大きく羽ばたかせ姿勢を保とうとするが、切り裂かれた翼はまるで穴の開いた団扇の様に空をきる。

崩れるようにクックが地に横たわった。

そのクックの正面にジャックが居た。

「うおおおおおおおおお！」

抜刀斬りでは無いモーション。

低く体の斜め後ろに大剣を構え、足に、腕に、力を込める。

ギユツと柄を握る手が音を立てた。

「りゃあああああああああ！」

会心の一撃、とでも言うのだろうか。

低く構えられていた大剣が大きく弧を描き、立派な嘴へと振り下ろされる。

バキイイ！

巨大な骨を強引に折るとこんな音がするのではないだろうか、という乾いた音と共に、砕け散った嘴の欠片が辺りに散らばった。

クアアアアアアアアアアアツ！

その一撃にクツクは大きく声をあげ、破れた翼を強く羽ばたかせる。翼膜が破れているとはいえ、作り出す風圧は強烈でジャックはその風に押されるように後方へと下がった。

立ち上がったクツクはリズイの砲撃に傷ついた足を引きずりながらジャックから離れると、軽く体を沈める。

「リズイ！ペイント！」

その動作を見たジャックがリズイへと声を投げる。

「ん！」

リズイはその声に道具袋から1発の銃弾を取り出し、素早く装填、射撃。

銃弾がクツクの尻尾辺りに着弾すると、なんとも言えぬ独特の匂いがあたりに立ち込めた。

リズイが放った銃弾はペイント弾と呼ばれる特殊弾。

殺傷力は皆無だが、ペイントの実とハンター達が呼ぶ実の液を対象

に浴びせる事を目的とした銃弾だ。

ペイントの實の匂いは非常に独特の香りで、訓練すればある程度の指向性を持って嗅ぎ分けることが出来る。

傷を負うと様々な方法で戦場を離脱する飛竜を追いかける上で必須とも言える技術だ。

そんな事をされてるとは露知らず、クックは破れた翼を普段よりも強く大きく羽ばたかせ、傷ついた体を癒すために大空へと飛び立った。

飛竜討伐入門といわれるイヤンクックだが、末席とはいえ

飛竜と呼ばれるスバ抜けた生命力を持つ生物に分類されているだけはある。

余程の致命傷で無い限り、じっくりと養生すれば完全に回復できると言われる。

砕け散った嘴はともかく、翼や足の傷程度であれば数日おとなしくしていれば完治するだろう。

二人としては、回復される前に後を追いかけて、決めてしまいたいところだ。

しかし二人は飛び立ったクックを直ぐに追おうとはせず、落ち着いた様子だ。

クックが飛び立ったのを確認して、ジャックは道具袋から砥石を取り出し、先ほどのクックからの攻撃でこぼれてしまった刃を研ぎなおす。

リズィは道具袋から魚やら飛竜の背骨やらを取り出し、自分が使用する砲弾をサッツと作っている。

一度飛竜に見つかれば早々に武器の手入れや弾薬の調合などしている余裕は無い。

突然の遭遇で無い限り、飛竜と向き合う時は常に万全の状態で行くのは言うまでも無い事だ。

ものの2分程でお互いの作業を終わらせると、二人ともハンターギルドから支給された固形食糧を口にした。

お互いに空腹という程腹が減っている分けではないが、かといって十分といえるほどでもない。

武器の手入れや弾薬の調合以上に、自分の体調は万全にしておく必要がある。

食べられる時に食べ、休めるときに休む。

ハンターの基本と言えるだろう。

「…場所は？」

決して美味しくない固形食糧の味は何度食べても慣れない。

わずかに眉をしかめながら食料を嚙下したリズイの問いに

ジャックはスンスンと鼻を鳴らし風に混じるペイントの実独特の匂いを探る。

「北西の方向だな」

リズイもまた同じ様に匂いの方向を確認しながら、道具袋の中から地図を取り出す。

ギルドから支給された大まかな周辺地図だ。

現在彼らが居るのが地図の中央付近。

その北西の方向に水場を表す印とチェックマークが見て取れる。

「水場がある」

「水場か…水分補給したら飯食いに行くか、寝るかのどっちかだな」
地図を広げるリズイの後ろから覗き込むよう、ジャックも地図へと視線を落とす。

水場からやや南東、今彼らが居る中央と礼の水場との中間点辺りにもチェックマーク。

「来る途中で見つけた食いかけの生肉があつたのが…」

ジャックがそのチェックマークを指差す。

「…寝るとしたら」

「あっち、だな」

クイクイと彼の背後にある崖上の洞窟への入り口を親指で示す。

リズイもそれに答えるように無言で頷いた。

「翼も破れてるし、ご自慢の嘴もぶっ潰した。暫くすりゃ寝るだろ。」

素直に寢床で待つかね」

「それが良い」

意見がまとまると、二人とも手早く荷物をまとめ移動の準備に取り掛かる。

といつても、出していたのは携帯食料と地図、砥石程度のものだが、道具袋をぶら下げて崖をよじ登る。

先ほどリズイがヘビーボウガンを展開していた場所だ。

その奥に天井の崩落した洞窟への入り口がある。

大型の飛竜が着陸できるだけの広さがあり、雨風をある程度防げるその場所は飛竜の巢にされている事が多いそうだ。

洞窟の入り口を覗き込む。

冷たい風が吹きぬけ、それと共に生臭い様ななんとも独特の匂いが流れ込んでくる。

ジャックを先頭にゆっくりと洞窟の中を進む。

少し進むとすぐに日の差し込む大きな広間に出た。

恐らくアプノトスのものだろう、大きな動物の骨が転がっているのが見える。

他にも小さな骨が地面を覆いつくす程に散乱し、陳腐な表現だがまるで骨の絨毯のようだ。

広間の入り口で覗き込むように様子を伺っていたジャックが、後方に居るリズイへと振り向いた。

「大丈夫、特に何も居ないな」

「ん」

飛竜の巢には飛竜おこぼれや飛竜の卵を狙いランポス類が居る事がある。

ジャックの大剣、リズイのヘビーボウガン共にそうした中型から小型のモンスターを相手にするのは比較的苦手な部類に入る。

散弾と呼ばれる銃弾を使えばヘビーボウガンでも対処はさほど難しくないが、

広範囲に小さな銃弾が広がる散弾は味方にも被害が出ることもあり

扱いが難しい。

チームを組んですぐの頃に一度、ジャックへの誤射でお互いに死に掛けた事があり、それ以来リズイは散弾は使わないようにしていた。腐敗臭の様な独特な匂いは得物の残りが腐敗した匂いと飛竜やモンスターの糞の匂いが混じったもののようなようだ。

ジャックが鼻をひくつかせ、眉をひそめた。

「飛竜の巣つてのはどこも似たような匂いだな」

「ペイントの匂いがちよつと、分らない」

「だな。クックが来る前にさつさと罨仕掛けるぞ」

「ん」

ジャックは道具袋からかぼちゃ程の大きさの物を取り出すと、適当な場所に置き、その上部についている紐を引く。

シュツ、という音共にかぼちゃ大のそれを中心に大きくネットが広がった。

「うし、んじゃ隠れるか。麻酔の準備は良いか？」

パンパン、と落とし穴を仕掛けた場所を叩き設置具合を確かめるジャック。

「大丈夫」

洞窟の割れ目にヘビーボウガンを展開し、銃弾の装填をしているリズイが答える。

装填しているのは先ほどと同じ榴弾だが、それとは別にすぐ手の届く辺りに二発の赤い銃弾も用意してある。

それを見たジャックも頷き、リズイの隠れる洞窟の割れ目へと体を滑り込ませる。

この割れ目から崩れたのか、大きな岩が割れ目の前に転がっており隠れるには悪くない場所だ。

ジャックが割れ目へと体を入れたのとほぼ同時、日の差し込む洞窟に一つの影が走る。

唯一の光源である崩落した天井から差し込む日差しを遮って、傷ついた巨体がゆっくりと降りてきた。

割れ目に身を潜める二人はさらに体を小さくし、岩の隙間からクツクの様子をのぞき見る。

ピンク色の巨体を浮上させる風圧を受け、絨毯のように散らばった小さな骨の一部がカラカラと音を立てて転がる。

ズウンと重厚な響きを上げ、ジャツクの仕掛けた罠のすぐ近くへと着地。

せわしく首を回し、辺りを警戒しているようだ。

息を殺し、ひっそりと隠れる二人の方へもクツクの視線が向くが、二人には気づかない様子でまた違う方向へと向きをかえる。

暫く首を回し、耳を動かし辺りの気配を探っていたが、外敵無しと判断したのか、

傷を負った足を引きずりながらゆっくりと歩き出した。

一步、二歩と歩みを進め、三步目を踏み出したその時、その場に穴が開いていたかのように地面がへこみ、クツクの下半身を地中へと引きずり込んだ。

彼が仕掛けたのは通称落とし穴と呼ばれるトラップの一種だ。

対飛竜用のトラップとしては比較的ポピュラーで、且つ実用性の高いトラップ。

ギルド特製のトラップツールの効果で、展開したネットに超重量が掛かるとその下の地盤を柔らかくし、対象の重量を利用してやわらかくなった地面へと落とす。

効果時間はさほど長くなく効果が切れれば地盤は元の固さに戻るが、地中を進むような種類を除き大抵の飛竜は効果時間中は脱出が出来ずにバタバタと足掻くことしか出来なくなる。

どういう効果で地盤をやわらかくしているのかはギルドの秘密だそうだが、ジャツクはもとより、他のハンターも柔らかくなる理由など全く気にしない。

彼らにとって重要なのは、使い方が分かりしつかりと効果がある、という事だけだからだ。

クツクがトラップに掛かったと見るや否や、ジャツクは柄に手を沿

え走り出す。

リズイはすでに装填済みのボウガンの狙いをつけ、射撃。

疾走するジャックの脇を突き通るような風切り音がすり抜けていく。次瞬、クツクの胸部で爆発が一発。

落とし穴から抜け出そうともがくそれとは別に大きく仰け反るクツク。

その間にジャックがクツクとの距離を詰め、大剣を引き抜く。

先ほど爆発があった付近、クツクの胸部へと大剣を横薙ぎに振るう。ブオオンという力強い音を上げ、爆風で甲羅の吹き飛んだその場所を切り裂いた。

刃より吹き出る冷水に混じり、クツクの鮮血が飛び散る。

激痛と抜け出せない事でクツクは更に大きく暴れ出すが、落とし穴の効果はまだ切れない。

柔らかくなつた地盤は足に力を入れれば入れる程より深く沈み込む。ほぼ無防備のクツクに対し、ジャックは更に振りぬいた大剣を振り上げ、ずに大剣は地面に降ろし片手で抑えつつ、空いた片手で道具袋から球体を取り出す。

赤いその球体を暴れるクツクの顔面へと投げつけると、白煙が上がリクツクの動きがわずかに鈍くなる。

更に、割れ目からはリズイが赤い銃弾を装填したボウガンを構え、そして射撃する。

着弾すると同じように白煙があがり、痛みに暴れまわっていたクツクがすっかりとおとなしくなってしまった。

長い首がゆっくりと地に横たわり、脱出のためにせわしく動いていた翼も力なく地に落ちた。

クツクは罠にはまっただまま寝てしまっていた。

二人が使ったものは捕獲用の麻酔薬だ。

ジャックは投げつけて使うもの。

リズイはボウガンに装填し射撃で使うもの。

どちらもマヒダケという麻痺性の毒キノコとネムリ草という昏睡を

誘う野草が原料だ。

一度昏睡状態に陥ると相当長い間は目が覚めることが無く、目が覚めたとしても更に長い間体の自由が利かないという非常に強力な麻酔薬である。

傷ついた飛竜にしか効果が無いというのが珠に傷ではあるが、捕獲任務では欠かせない道具だ。

大抵は二発程度で昏睡状態に陥るのだが、このクックも例に漏れずジャックとリズィそれぞれ一発ずつですっかりと夢の中のような

「ふー、とりあえず依頼完了ってな」

「ん、おつかれ」

高らかにいびきを上げるクックの様子に二発目を準備していた二人は戦闘状態を解除して一息つく。

落とし穴に半分…とは言わないが、1/3は埋まっているはずなのだが、

それでも通常のクックと同じくらいの大きさがあるそれを横目にジャックは呆れに似たため息をついた。

「しっかしでけえな。ここまででかくなるもんなのかねえ」

「…実際に居た」

「そりゃそうだけどな。こんだけでかけりゃ素材も色々剥ぎ取れるよな。仕留めて剥ぎ取った方が良かった」

「……」

「…なんでもねえ。それよりもリズィ、発煙弾頼む」

「ん」

なにやら半眼でジャックを見ていたりリズィだが、道具袋からグレーの銃弾を取り出すと装填し、ぼっかりと開いた天井へと銃口を向ける。

引き金を引くと、シュルルルと音を立て、白煙を出しながら銃弾が高く高く昇った。

「後はアイルーの連中が来るまで待つだけか」

「7500ゼニー……やった」

両手で小さくガッツポーズを作るリズイ。

普段あまり感情を表に出さない彼女だけに、今回の報酬はかなり喜ばしい事だということが伺える。

今回の報酬は一人頭7500ゼニー。

通常の飛竜討伐依頼の報酬は5000〜8000といったところだ。

しかしこれは一人頭ではなく、パーティー単位での報酬。

つまり、二人なら半分、三人なら三等分という事になる。

ジャックとリズイの場合なら、普段の報酬の二倍から三倍の報酬という事になる。

リズイが喜ぶのも無理は無い。

そんなリズイの様子を尻目に、ジャックは何か考えるように腕を組むのであった。

1章 (3)

暫く武器の手入れをしたり、持参した生肉を焼き食事を取ったりして時間を潰しているのと遠くの方から何やら聞こえてきた。うにゃーうにゃーと。

「やっときたか」

ジャックが洞窟の入り口へと視線を向けると、小さな何か十程度群れになって近づいてきた。

四足歩行で走るその姿は猫、猫そのものである。

しかし普通の猫と違うのは、それぞれがロープやらハンマーやら、色々道具を背負っているところだ。

アイルー。

人と獣との中間の様な存在で、人間族、竜人族と共に三種族の一つとして数えられる獣人族にあたる。

見た目は猫そのもので、習性も猫に近いものがあるが、その知能は人間族にも負けずとも劣らず。

独自の生活圏を形成し生活しているものも居るが、人と共に生活をするものも居る。

今走ってきた彼らは後者に当たるものたちだ。

先頭を走ってきていた一人がジャックの前で止まると二本足で立ち上がり、ペコリと頭を下げた。

「毎度ありがとうございます」

彼らは捕獲した飛竜を運搬するという仕事を請け負うアイルーだ。他にも負傷したハンターの運搬や、剥ぎ取った大きな素材の運搬なども請け負う。

「ニャー達への報酬はいつもどおりギルドに請求しておくニャ。

マリアからそっちに請求が行くと思うニャ」

「ソレは良いんだが、コジロー、お前んとこ最近ちょっと料金高くないか？」

「仕方ニヤいニヤ、ここ最近は捕獲が沢山沢山ニヤ。ちょっと多すぎるくらいに沢山ニヤ。お蔭で休みもニヤいニヤ。皆へトへトニヤ。多少色をつけてもバチは当たらないニヤ」

「へえへえ、分かりました。」

「で、これが証明書ニヤ。いつもどおりマリアに見せれば報酬が貰えるニヤ」

腰につけた大きな木の実を切り抜いて作ったポーチの中から一枚の書類と取り出す。

自分の肉球でポンと資料の隅にスタンプを押して、ジャックへと差し出した。

軽く内容を見直して頷く。

「OK、んじゃ後は任せたぞ」

「分かったニヤ」

彼の後ろでは連れて来た他のアイルーがクック運搬のための準備をセカセカと始めていた。

コジローと呼ばれた茶色のぶちのあるアイルーが文字通り見上げるようにして、すっかりと寝入ったクックを見る。

「しかしデカイニヤ。ちよっと増援が必要になりそうだニヤ」

「おいおい、人数増加で料金も追加とか言うなよ？」

「本当ニヤらそうしたいところニヤんだけど、二人には世話になってるニヤ、今回は料金の追加はしニヤいニヤ」

「世話になってると思うならその分安くしろよ」

「それとこれとは話が別だニヤー、ニヤハハ」

「ったく、調子がいい…リズィ、帰る…またか」

帰ろうと声をかけようとしたジャックだが、近くにリズィが居ない事に気づく。

はあ、とため息をついて作業を進めているアイルー達の居る一角を見た。

「ニヤ、ニヤにをするニヤ」

「……ぶにぶに」

作業をしていたアイルーの肉球をぷにぷにと押したり撫でたりしているリズイの姿があった。

「やめるニャー！」

「……ぷにぷに」

「ニャー！」

グースカといびきを上げて寝る巨大なイヤクックの前でじたばたと暴れるアイルーの前足を取って肉球の触感を楽しむ少女ということなるとも変な絵が出来た。

アイルーは本気で嫌がっているように見えるが、リズイはまるで気にしていない様子だ。

いつも通り半目の無表情…のようで口元はわずかに三日月になっている。

「りーずいーいーくぞー」

「ん？」

ガチャガチャと鱗の擦れる音を上げてジャックが手を振ると、その音に漸く気づいたようで振り返る。

「肉球スタンプ貰ったから帰るぞ」

「ん〜」

「弄るなら自分の家のアイルーにしとけ。こいつら慣れてねえんだから」

「…わかった」

名残惜しそうに手を離すと、弄られていたアイルーが慌ててクックの裏側へと走って逃げていく。

運搬の準備で騒がしかったはずの洞窟の中が一瞬シーンとした。

リズイが逃げていく方向をジーと見つめてから、軽く辺りを見回すと、他のアイルー達は慌てて作業を再開する。

ジャックの隣でそれを見ていたコジローも、普段はピンと立っている耳をへタツと倒して呆れた様子だ。

「……相変わらずだニャ」

「あいつも悪気があるわけじゃねえんだけどさ」

「悪気が無いからタチが悪いニヤ。あれのお蔭でアンタらの担当をしたがらニヤいのが多いニヤ」

「返す言葉もねえよ」

「まあいいニヤ。後の事はニヤー達に任せて早く帰るニヤ。ほっとくとまたやり出すニヤ」

「あいよ、じゃあ頼んだぞ」

うにやうにやー、と返事をして、準備を行っているアイルールの集団の中へと混ざっていった。

作業をするアイルル達をジーと見つめるリズイの腕をジャックが引っ張って、二人の狩りは漸く終わるのだった。

2章 (1)

迎いの馬車に乗り込んでから二日あまり、漸く見慣れた城壁が見えてきた。

堅牢な城壁に囲まれたその街の名はドータという。

ドータのハンターギルドはこの地域のハンターを統括するギルドで、ジャックとリズイもこの街のギルドにハンター登録をしている。

ぽっかりと口をあけた城門は二人の乗る馬車以外にも多くの馬車が、人が行き来し賑わっていた。

二人の乗る馬車もまたその大口に飲み込まれていく。

城門をくぐった先は大きなメインストリート。

城門に近い道の両サイドには大きな宿屋や酒場が連なり、宿屋街と呼ばれている。

その街のハンターギルドに登録しているハンターは、ギルドの管理するハンターハウスと呼ばれる

物件に寝泊りするのだが、所用などで違う街へと遠出する時はハンターもこうした一般の宿屋を利用する事が多い。

もっとも、ハンターの宿泊を拒否する宿屋もあり、泊まれるのはボロイ安宿である事が多いのだが。

メインストリートを真っ直ぐに進むと噴水があり、その噴水を迂回した先で馬車は二人を降ろした。

二人の前には酒場の様なつくりになっているハンターギルドが、昼間から騒がしい空気を垂れ流している。

木戸を押して店内に入ると、タバコと酒の匂いがむわっと立ち込める。

昼間から酒を浴びるように飲むハンターも少なくない。

酒代が無くなると適当な依頼を受け、受け取った報酬は殆どが酒代に消えるというハンターも居る。

それとは別に、今も店の奥のほうではジョッキを盛大にかち合わせ

るハンターのグループがあった。

狩りが終わった時は一回限りのパーティーであつても一緒に一杯やる、というのがハンターの通例でもあるため、それ程珍しい光景という訳でもないが。

ジャックがその匂いにわずかに眉をひそめる。

何度も何度も足を運んだ場所であるが、この匂いは未だに慣れないらしい。

ツカツカと歩みを進め奥の依頼の受注や報酬の精算を受け付けるカウンターへと向かう。

カウンターの前には先客が居るようで、カウンターの奥に居るマリアと口論をしているようだ。

報酬の額や条件などでハンターとギルドで意見の食い違いがあることは良くある。

ハンター達も己の命を掛けて依頼を受けるのだから絶対に報酬に妥協はしない。

もちろんギルドも必要以上の報酬を出す訳には行かないのだから、当然意見が衝突する。

ハンターギルドでは日常茶飯事な事で、昼間から酒に浸るハンター達も、次の狩りの相談をする者も、特に気にした様子は無い。

今来た二人も同じく特に気にする事なく近づいていく。

言い争っているのは当然ハンターだが、背には細身の大きな刃、太刀が背負われている。

大剣にも劣らない切れ味と威力を持ちながら極限まで軽量化され、構えたままでも走る事が出来る武器。

攻撃の度に武器をしまう必要のある大剣に比べ機動力が格段に高い。その代わり、軽量化の代償として繊細になった刃は大剣のように盾として利用することが出来ないが、

気合の一撃は飛竜の鱗すらやすやすと切り裂く切れ味を發揮し、素早く動き、切り裂くという大剣よりも更に攻撃に特化した武器と

言えるだろう。

他に仲間らしき人影も見えない事もあり、恐らくは単独で依頼を受けているものだろう。

聞き耳を立てるわけではないが、言い争う声はでかいが故に自然と聞こえてきてしまう。

聞こえてくる声は女声。

といっても聞こえてくる声はマリアの穏やかな声では無く、少々幼さの残る声だ。

声は太刀を背負うハンターのようだ。

「！？」

マリアが困った顔をしながら色々と言明をしているが、ふとその視線に赤と蒼が入る。

「あー、ジャック君にリズイちゃん依頼終わったのねー？」

逃げる口実を手に入れたようで、声を上げて手を振る。

マリアの視線を追いかけられるようにして太刀を背負う彼女も振り返った。

その彼女とジャックとの視線が合う。

キツ、と力強い視線。

視線が実に分かりやすく彼女の意思を伝えるのだ。

(あたしの話はまだ終わってないですよ！)

とはいえ海千山千…とまでは行かないが、十分に経験をつんだジャックがその程度で怯むわけが無い。

カウンターの前へと進むと、思ったよりも軽い太刀の彼女の体を強引にどかしてマリアへと向き合った。

「おう、終わったぞ。これ肉球スタンプな」

「はいはい、コジローちゃんから聞いてるわー。クック討伐ご苦労さまねー」

クック討伐という言葉聞いてか、ジャックの隣に立つ事になった彼女が鼻で笑ったのが聞こえた。

視線だけで彼女を見るが、別段気にせず終了の手続きをするマリ

「アへと視線を戻した。

ジャックのその態度が気に入らないのか、鼻を鳴らして彼女はカウンターに背を預けた。

「はい、それじゃ報酬ね。コジローちゃんから800ゼニーの請求が来てるから、

ジャック君とリズイちゃんにそれぞれ400ゼニーの負担で、報酬はそれぞれ7100ゼニーね」

「えっ！」

その報酬額を聞いて、不機嫌な顔をしていた太刀の彼女が声を荒げた。

「クック討伐で一人7100!?それ本当ですか?何ですかその差!?!」

バン!とカウンターを強く叩き、マリアへと詰め寄る。

ずいつと寄せられた顔に思わずマリアも仰け反り、ぽりぽりと頬をかいた。

「あたしはゲリヨス討伐で4500ゼニーだったんですよ?それが…

たかがクックの討伐で7100?そんな割の良い仕事があるんならあたしにも回してくださいよ!」

ぎゃーぎゃーと騒ぎ立てる彼女。

ハンターには荒っぽい性格のものが多く、多少の荒事はジャックも慣れているとはいえ耳元で叫ばれば我慢もできなくなる。

呆れ顔のまま叫ぶ彼女側の耳をふさぎ、ため息と共に言葉を吐き出す。

「ごちゃごちゃとうるせえなあ」

その言葉にキツ!と再び鋭い視線を向けた。

先ほどよりも強く、鋭く、挑戦的な視線。

「クック討伐で7100ゼニーって何したんですか!クック討伐なんて4000ゼニー程度が相場ですよ!?

捕獲しても7100ゼニーなんて普通絶対に出さないとですよ!…」

「普通じゃ無いのよー」

完全に興奮状態になった彼女をなだめるような穏やかな口調でマリーアが口を出した。

「普通じゃ無いってなんなんですか？」

「説明すると長くなるから、簡単に説明するわねー。」

「一つは確実性、もう一つは警戒度が普通の依頼よりもずっと高いラックなのよー。」

「納得いかないですね。クックの危険度がそんなに高いですか？」

「中堅クラスが四人死んでるのよー。うち三人はパーティーを組んでたわー」

「どうせクックだからって油断し」

そう思わず口走った後に、彼女はハツとした様子で口をつぐむ。

しかし、出てしまった言葉は決して戻らない。

「優れた力と経験を持っていたハンター達よ。貴方程度では足元にも及ばないほどの」

マリーアは相変わらずに笑みを浮かべているものの、ジャックはその姿に生唾を飲み込んだ。

いつものような暖かな雰囲気はなく、彼女の纏う空気は触れればざっくりと切り裂かれるような

そんな鋭さがあった。

ジャックも時々忘れそうになるのだが、彼女もまたハンターなのだ。それこそ、海千山千、幾多の死線を乗り越えてきた列強に名を連ねる程の。

太刀の女も良くも悪くもハンターだ、その雰囲気につき顔を青くする。

「わ、わかりました」

慌ててマリーアから視線をはずし再びカウンターに背を預ける。

マリーアの顔が見られないからじゃない、疲れたからだ、と自分に言い聞かせつつ、

先ほどマリーアが口にした名前を頭で復唱していた。

(ジャック…どっかで聞いたことあるような…)

「はい、7100ゼニーねー。いつも通り貯金しておけばいいかしらー?」

「おう」「ん」

先ほどの喧騒も全く我関せずという姿勢を崩していなかったリズイもこの時ばかりは前に出て確認する。

しっかりと記帳された事を確認するとついでに料理とビールを注文した。

「そうそう、今日はココット村から黄金魚が届いてるのよー。ジャック君懐かしいでしょー?」

「あつちでもそう滅多に食えねえって。けどま、懐かしいのは確かだな。じじいまだ元気かねえ」

「ふふつ、竜人族ですもの、まだまだ元気って話よー?」

何気ないマリーアとの会話をすぐ隣で聞いていた、というか聞こえてしまった太刀の彼女が、

ゆっくりと視線をジャックへと向けた。

「ココットの…ジャック?」

「あん?」

「ココットのジャックつてもしかして…剣舞のジャック!?!」

ずいっ!とジャックへと顔を寄せ、じーっつとジャックの顔を見つめる。

対するジャックは、寄せられた顔から逃げるように上体を逸らせて、なにやらばつの悪い顔をしている。

ちなみにリズイは何のことやら、といった顔で座る席を探していた。

「あー、まあ、なんだ…」

「やっぱり!?!でもなんで大剣を」

「ふふん、ジャック君の素性を知ると皆そついうのよねー」

マリーアがビール樽からジョッキに並々と注ぎながら、楽しそうな声を上げる。

その言葉にジャックはより顔をしかめた。

「その剣技、舞の如し、その鋭き切っ先は堅殻をも切り裂く。」

期待のホープ、剣舞のジャックと言えば結構有名よねー?」

「マリーア…茶化すなよ」

「ジャック君に憧れて、太刀を使い始めた子は結構いるのよ?」

「…広まってすぐだったから、目新しさで使ってただけだろ」

「ジャック君の活躍のお蔭で広まったんだと思うわよー?」

ドン、と泡の溢れるジョッキを二つカウンターに置く。

置いた勢いで更に泡が零れた。

「…有名だったんだ」

並々と注がれたジョッキに手を伸ばしながら、リズイがジャックの顔を覗き込んだ。

「周りが勝手に騒いでただけだって」

ばつの悪さを隠すように、ジョッキに手を伸ばし、一気に煽るジャック。

一息でジョッキを空にすると、ぐっとジョッキを突き出して追加をマリーアへと頼む。

彼女はクスクスと笑いながら、渡されたジョッキを受け取り、ビールを注ぐ。

その隣では太刀を背負う彼女が先ほどの剣幕は何処へいったのか、キラキラと目を輝かせていた。

「ほ、ほ…本物……」

「そーよー?本人はその通り名好きじゃ無いみたいだけどねー」

「んな大した事してねえのに騒がれてる身にもなってくれ。居心地が悪くてしょうがねえ」

再びビールで一杯になったジョッキを差し出されると、今度は一気ではなく、軽く煽る。

ごきゅつと喉を鳴らしビールを流し込むジャックを、何か決心したような顔で彼女は見ていた。

「あ、あの!」

「ん?」

「弟子にしてくださいっ!」

「ダメ」

返答までに掛かった時間、0.5秒。その返答をしたのは他でもない
「……なんでお前が返事するんだよ」

隣でチビチビとビールを飲んでいた、リズイだ。

立ち位置的には、ジャックを挟んで向こう側に太刀の彼女。

彼女側からだとは小柄なリズイはジャックの体に完全に隠れてしまっ
ているかもしれない。

ジョッキを下ろしたジャックが半目でリズイへと視線を向けると、
彼女も同じく半目で見返す。

「……じゃ受ける？」

「……いや、まあ、断るけどさ」

ジャックの返事を聞く前に、リズイはぷいっとそっぽを向いて、ま
たビールをちびりちびりとやり始める。

彼はガシガシと頭を掻いて思わずため息をこぼした。

そんなやり取りを聞いていたのかいないのか、弟子志望の彼女はガ
バツと頭を120度程下げて声を上げる。

「お願いします！」

「だから、断るって」

「あたしも強くなりたいんです！」

「だから話聞けよ」

「雑用もやります！肉焼き係りもやります！我ながら肉焼きはつま
いですよ」

「いや、そーいう問題じゃなくてだな」

「報酬も生活できる程度でかまいません！使えないと思っただら見殺
しでもかまいません！」

「おーい」

「お願いします！お願い」

ダン！

ジャックの目の前のカウンターで大きな音が響く。

その音に店内の視線が一瞬集まった。

頭を下げていた彼女もその音にビクツと顔を上げる。

そこには、ちびりちびりとやっていたはずのリズイのジョッキが、空になってカウンターのの上に置かれていた。

「…おかわり」

「ふふ、はい」

妙ににこやかな笑みのマリーアがジョッキを受け取り、ジョッキをビールで満たしていく。

ビールが注がれる間、ジャックは恐る恐るリズイへと視線を向けると、

ちょうど彼女もチラツと視線を向けてきていた。

が、視線が合うや否や、やはりぷいっとそっぽを向くのだ。

「うふふ、お待たせ」

そんな二人の様子を楽しそうに見ながら、マリーアがジョッキを運んでくる。

何故か二つ。

一つをリズイへと渡して、もう一つは自分で口をつけた。

「それでー？どうなったのー？」

口についた泡をなめとりながら、楽しそうにマリーアが聞く。あえてそっぽを向いているリズイに向けて。

「…知らない」

「あらあら、ご機嫌斜めねー？」

「…そんな事無い」

マリーアの言葉で、止まっていた時が動き出した弟子志望の彼女が軽く頭を下げた状態でジャックを覗き込む。

リズイ程ではないが、彼女も決して身長が高いわけではなく、比較的長身のジャックに対しては自然と上目遣いになる。

「その…ダメですか？」

「あ、いや」

ジツと見つめてくる彼女を見かえずジャックだが、少々頬が赤い。正直なところ、彼女の目鼻立ちはなかなか物だ。

人によっては中々どころか、かなり良いと言う人も居るだろう。ハンターになろうという者は男女問わず、見た目など気にしない無骨者が多い。

さらに多くのハンターは過酷な環境での狩りに肌はボロボロになる。加えて性格も男勝りな女というものが多く、恐らくハンターは女性の美しさというものからは一番遠い職業だと思われる。

がしかし、彼女は本当にハンターなのか？と思えるほどに透き通った白い肌をしていた。

髪も荒れている様子は無く、黒い瞳とかすかに赤みがあった黒髪が良く映えている。

綺麗な服に身を包み、身だしなみを整えれば、いいところのお嬢様でも通じそうだ。

もともと、彼女も性格の荒さは胸を張ってハンターと言い切れるレベルなので

しゃべらなければ、という前提条件がつくが。

彼の頬の赤さはビールのせいだけでは無いのかもしれない。

そんな彼女の姿をしばし見入っていたジャックだったが、隣から伝わってきた絶対零度の空気に頬を引きつらせた。

「教えるも何も、今は太刀使ってねえから」

「じゃあ…立ち回りは大剣も太刀も似ていると思いますから、そこだけでも」

「ってもなあ…」

ぼりぼりと頭の後ろを搔きながら、チラッとリズィへと視線を向ける。

相変わらずそつぽを向いたままちびりちびりとやっているが、頬と耳が真っ赤になっている。

あまり強くないのに、一気にやったお蔭で大分回ってきているよう

だ。

リズイは何故か猛烈に反対しているようだが、ジャック自身はそれ程反対しているわけではない。

もつとも、弟子などという大層なものではないが。

ジャックはここ最近の狩りで感じてきた事がある。

機動力不足。

ジャックの使う大剣もリズイの使うヘビーボウガンも攻撃力という点では問題は無い。

しかし、どちらも癖が強く、どちらかと言えば止めとしての一撃を放つ側に近い。

特にジャックの大剣はハイリスクハイリターンの武器で、止めとしての攻撃力は大いに期待できるが、

無傷、もしくはそれに順ずる程度の飛竜を相手にする場合はリスクが高く、攻撃をしづらい。

無傷で走り回る飛竜へ先制攻撃を行い、ジャックやリズイが攻撃をするための隙を作る機動力。

その機動力を補うために、片手剣や太刀の使い手を募集しようかと考えていたのだ。

うーんと腕を組みながら悩むジャックを見かねてか、マリーアが一枚の書類を取り出す。

「彼女、イリアちゃんのギルドカード見る？」

「……一応見るか」

マリーアから受け取ったギルドカード 要はその人物の履歴 を見る。

まずは分りやすい物差しであるハンターランクの欄へと視線を向ける。

ハンターランクは名の通りハンターのランクである。

細かく数十のランクに別れており、それらを大まかめに3つ、上級、中級、初級に分かれる。

上級の上には更に上の特級と言うランクがあるという噂もあるが、

真偽の程は確かでない。

彼女は大まかな枠組みでは初級に当たるが、細かなランクを見るとそろそろ中級に分類されるランクだ。

年も若く、まだ19らしい。

ジャックが新米のハンターとして動き出したのが17の時なので、近いものはあるだろうか。

自分が今年で23になる事を考えると、確かに師弟という立場でも悪くは無いだらう。

飛竜の討伐履歴へと視線を移す。

それなりに多数の飛竜を討伐しているようだ。

なかでも、一体だけではあるが、グラビモスの討伐記録があることに驚いた。

初級ランクでのグラビモス討伐は早々出来るものではない。

もつとも、パーティーで討伐した場合でも討伐記録に残るため、初級でも記録されている者も居る事は居るが、

その場合は大抵調査や罾を仕掛けるだけであつたりガンナー系の補助役であつたりする事が多い。

先ほどのやり取りを見る限り、彼女が補助役に回るといふ事もないだろうし、見たとおり武器は太刀だ。

となると、それなりに役目を果たして討伐したという事になる。

「単独でディアブロス討伐成功のジャック君程じゃないけど、結構期待されてたりするのよー？」

「なるほどね、腕は悪くないみたいだな」

「じゃあ！」

「ダメ」

ジャックの脇から同じようににべも無い返事。

返答速度は更に速く、言い終わるとほぼ同時だ。

頑なに拒むリズィにジャックも、珍しくマリーアも苦笑を浮かべた。

「ジャック君はどうなのー？」

助け舟というわけではないが、マリーアがジャックへと意見を問う。

彼女の見た感じ、ジャックとしては恐らく悪くないと思っているの
だろうと判断して。

「長く付き合うようになるかはわからねえが、まあ一回狩りしてみ
てから、って感じか」

「それじゃあ」

ぐいつと近づいて下から覗き込むイリアに上体を仰け反らせて、彼
女の顔の前に手をかざす。

「ただし、師になるつもりは毛頭ねえ。同じ狩り仲間って事だな。
それに俺らと合わないと感じたら悪いが抜けてもらっさ」

隣で不貞腐れてるリズイの小さい頭に、狩りで帰ってきたばかりで
汚れた手を置いて、軽く撫でる。

同じく狩りから帰ったばかりで砂埃で汚れた指どおりの悪い茶色の
髪感触を確かめるように。

「とりあえず、こいつと別れるつもりはねえから、長く付き合いた
けりゃこいつに認められるようにしてくれ」

「って、ジャック君は言ってるけど、リズイちゃんはどのなの？」
マリアの言葉にまだ半分ほど残っているジョッキをカウンターに
おいて、うつむく。

彼女とて二人での狩りに弱点がある事は承知している。

そのせいで時折危機に見舞われる事もあるが、それはハンターとし
て覚悟している部分でもある。

それに、最初にパーティーを組んでからもう四年以上になるが、そ
の四年間は問題なくやってこれた。

最初の頃こそ連携のミスで死にそうになる事もあったが、お互いの
癖を知った後は

我ながらうまくやっていると思う。

今後も同じようにうまくやれるという保障は無いが、しかしうまく
やれないという確証も無い。

人数が増えるという事は、それだけ危険性が減るとい事になるの
も承知している。

多くのパーティーが四人で編成しているのもそうだった点が強
報酬の配当が少なくなってしまうという欠点は確かにあるが、
死んでしまつては報酬も何も合つたものではないという事は、リズ
イだけでなく、

全てのハンターが理解している事ではある。

イリアの実力は未知数ではあるが、結局のところ彼女を加えた方が
色々の良い面が多い。

それは分かっている、分かっているが…。

チラツとジャック越しにイリアの様子を伺う。

彼女は暗い表情でリズイをじつと見つめていた。

先ほどの活発な雰囲気は微塵も無く、捨てられた子犬の様なそんな
様子にすら見えてくる。

マリアは相変わらずニコニコと笑みを浮かべているだけだし、ジ
ヤックはお前の判断に任せる、

と視線で語っている。

後は自分の一言だけだ。

断るのは簡単だ、ダメだと言うだけで良い。

しかし、自分が嫌だからという理由だけで断るのは、ジャックにも、
癪だがイリアにも悪いと思う。

話としては良い話だ。

彼女はまだ少々経験が足りないところがあるだろうが、そこは狩り
を通じて自分達が教えるなり、

自分で経験していけば良い。

逆に言えば、熟練されたハンターが入り、とやかく言われるよりも
ずっと良い。

成長の見込みが無ければ、また自分たちの肌に合わないと感じれば、
抜けてもらえば良いのだ。

ジャックも前提条件としてそれを上げている。

そう、やはり話としては、良い話なのだ。

「……………分かった」

しばしの無言の後に、コクツと小さく頷いて、リズイが承諾の言葉を放つ。

その一言に暗い表情を浮かべていたイリアが一気に笑顔へと変わった。

「あ、ありがとうございます！」

ジャックの体を迂回して、リズイの前へと出ると体育会系のノリでガバツと大きく頭を下げた。

その勢いにリズイもジャックの反応と同じく仰け反る。

小柄なりズイにしてみると、自分よりも大きな人が勢い良く頭を下げるのだから

ジャックよりも余計迫力があるように見えたのだろう。

深々と頭を下げる彼女から視線を外して、残ったビールを一気にあおった。

そんな様子にやれやれとため息を一つ付けて、ジャックがイリアへと手を差し伸べた。

「とりあえず、お試して事でよろしく頼むわ」

「はいっ！」

差し出された手を両手でぎゅっと痛いくらいに握り締める。

「あたしはイリア・ソフィーリア。韻を踏んでるんで覚えやすいと良く言われます」

「俺は…まあ知ってるみたいだが、ジャック・ローベル。でこっちのちっこいのが

リズリエル・ブランハルト。まどろっこしいんでリズイで通ってる」

「よろしくお願いします」

「……ん」

人見知りしないタイプなのだろうか、イリアが満面の笑みを浮かべて右手を差し出した。

一瞬ためらったリズイだが、反対していたとは言え、一度パーティーを組むと決めた相手の

握手を拒むほど彼女は礼儀知らずでも凶太い神経をしているわけで

も無い。

小さめのイリアの手と、更に小さなリズィの手がしっかりと結ばれたのを確認して、

ジャックもホッと一息ついた。

リズィが反対していた理由は分からないが、一度組むと決めたのであれば

彼女とて出来うる限り友好を深めようとするはずだ。

狩りをする上で仲間の友好関係は非常に重要な事だ。

イライラして感情が高ぶれば、普段は気づく事が出来るような事を見落とし、

判断力が低下すればなんでもない様な咄嗟の判断も出来なくなる。

今までもジャックとリズィの他に一度限りのメンバーを加えて狩りをする事は多数あった。

その辺の事は彼女も良く分かっていることだろう。

今はまだ多少険悪な雰囲気があるが、簡単な依頼をこなしていけば、そのわだかまりも知らず知らず消えてくれると思いたい。

もし、わだかまりが消えないのであれば、イリアには悪いが抜けてもらうしかないだろうが。

二人の仲がよくなるまでは、イリアのランクに合わせる事も含めてクックやゲリヨスと言った

低級の飛竜を相手にする事になるだろう。

そんな事を考えつつ、ジャックは残ったビールを一気に飲み干すのであった。

2章 (2)

「んっ……くあぁ」

埃っぽいベッドをきしませて、彼は大きくあくびをした。

窓からこぼれる陽光はもうずいぶんと高い位置から差し込んでいる。先日のクック討伐やら、その後のいざこざやらで疲れていたのだからか。

それとも、埃っぽく決して寝心地が良いとはいえないが、久しぶりのベッドでの睡眠だったからだろうか、ともかくすっかり熟睡していたようだ。少々寝坊をしてしまった。

改めて太陽を位置を確認すると、腹の虫が騒がしく鳴き出した。

我ながらげんきな奴だと思う。

彼が居るその部屋の奥の部屋には、雇ったアイルー達が料理番として待機していて、

金さえ払えばしっかりとした料理を作ってくれる。

やかましい自分の腹を満足させるために、アイルー達に料理を頼むのも悪くないのだが、

今はそんな気分では無いし、時間も無い。

彼らの作る料理は一流と呼べるもので、相当美味しいのだけれども作るのに少々時間が掛かる。

以前簡単なものを作ってくれ、と頼んだこともあったのだが、

『軽食で済ませるニヤらニヤー達に頼むより、その辺で買い食いた方が早いし安いニヤ』

といわれ断られた事がある。

味という面ではアイルー達の料理に勝る料理というのは早々無いと思うが、

融通という面では確かに買い食いの方が良い。

それに、彼らの料理は確かに高いのだ。

1回の飛竜討伐と同じくらい…とは言わないが、クック程度であれば5、6回食事をすると

その討伐報酬が飛んでしまう程度に。

もつとも、それは5人のアイルーに料理を頼んだ時に限るが。

アイルー達の決まりとして、一人の雇用主に対しては最大5人までとされている。

駆け出しのハンターでも彼らを雇う事が出来るが、その場合はまず1人の雇用から始まり、

ハンターとしてのランクがあがり、多人数雇ってもその給料を支払う能力があると判断されると

徐々に雇用可能人数が増えていく。

5人のアイルーを雇えるのは、ハンターの中でも指折りのベテランだけだ。

ジャックは現在3人のアイルーを雇っている。

4人目の雇用権はあるのだけれども、自分の肌に合ったアイルーが見つからずに未だ3人だけだ。

そんなアイルー達の待機する奥のキッチンをチラッと見つとも、彼はベッドから起き上がり

壁に掛けられた愛剣を手を取った。

その前には赤の鱗で作られた鎧がごちゃっと乱雑に置かれている。

今日は、先のクック討伐でかけてしまった刃の修繕に向かうつもりだったのだ。

修繕に出すだけなので特に鎧を身に纏う事はしないが、流石に下着姿で町を歩くわけにはいかない。

何の変哲も無い布地で作られた服を取り出すと腕と、足を通す。

よくある町人な格好に大剣を背負う姿は何処かシユールな気がするが、当の本人は気にしていない様子だ。

入り口の木戸を開けると、ジャックの瞳にオレンジ色の光が飛び込んでくるのであった。

ハンターギルドのあるメインストリートを城門から見て更に先に進み、細い路地裏に入って、

猫の集まる裏通りをこっそりと進んだところでその猫に追いかかれヒューヒュー言いながら逃げ回り、

振り切った…と思った次瞬、ここ何処だ？と思った先の小さな水路を渡り、

角を4回程曲がりながら、良く分からない細い通路を抜けた先に、うまいと評判のパン屋がある。

否、評判というか、噂…下手をすれば都市伝説に近いかもしれない。路地の奥の奥のさらに奥（だと思っ所）にあるためか、客は少なく、それに比例するように店舗も非常にこじんまりとしている。

一見するとパン屋に見えず、知らぬ人であれば通り過ぎてしまいうな、そんな店だ。

そんな店であるが故に、多くの人はこのパン屋にたどり着くことが出来ず、実際に美味しいのか否かを判断できずにあきらめる。

なので、その店の前に立っているジャックは、半ば呆然としていた。（実在してたとはい…思わなかったぜ）

申し訳ない程度に飾られた小さな看板にピンク色のペンキで書いている、その店の名前は彼も知っていた。

この街に住む者であれば一度は聞いたことがある噂ということもあるが、

彼のようなハンターにとっては非常に覚えやすい名前でもあったからだ。

「コンガのパン屋さん」

コンガというのは、体長1.5〜2M程の大きさの動物だ。

全身をピンクの体毛で覆われ、キノコが好物で沼地や密林といった場所に多く生息している。

動きは素早いが、猫の様な機敏さ、馬の様なしなやかさとは全く別で、

どちらかといえばその動きはコミカルだ。

後ろ足を投げ出した状態ですわり込み、尻尾を使ってキノコを食べる姿は可愛らしいともいえる。

しかし実際は動物、というよりは獣というほうが近いだろうか。

性格はそれ程凶暴では無いが、縄張り意識が強く、進入してくる相手に対しては攻撃を仕掛ける。

そのメインとなる攻撃が、放屁。つまり屁だ。

他にも自らの汚物を投げつけるなど、コンガと関わると必ず臭い話がついて回る。

しかもその匂いが強烈で、且つ持続性が強く中々落ちない。

汚物はもとより屁ですら浴びたならば、その匂いは所持している道具にもこびりつく。

砥石やペイントボールの様な道具は問題無いが、回復薬であったり、携帯食料であったりと

実際に口に入れなければならぬ道具にとっては死活問題だ。

例え空腹で走る力すらなくなってしまうたとしても、その匂いを口にするのは恐らく本能が拒絶するだろう。

そこまでに強烈な匂いを発するコンガ。

そのコンガがパンを作るといふのだから、覚えのないわけが無い。

彼もその名前を最初に聞いたときは何ともつまらないジョークだと思っていた。

しかし、話を聞いていくうちに、1人、2人と自分も聞いたことがあるという人物が現れ、

気づけば彼も心のどこかで実際にあるんじゃないかという気持ちになっただけ。

そのある意味幻ともいえるパン屋が目の前にあるという事実には驚きと共に喜びがジワジワと沸いてきた。

噂の通りであればそのパンは絶品だそうだ。

うまく帰り道を覚える事が出来たらリズイの奴も連れてきてやるう、そんな事を考えつつ

ジャックは店内へと足を踏み入れた。

木戸の開く音に反応したのか、店の奥から店長らしき人物が顔を出す。

身長2mはありそんな巨体に加え、頬に大きな切り傷の跡。

身に纏う空気は決して重くも、冷たくも無いのだが、見た目がかなり強烈だ。

ジャックはそんな予想外の店長にわずかに目を見張るものの、何事も無かったように店内を見回し始めた。

同じ様にその男も、一般人はまず持っていないであろう大剣を背負う来客に少々驚いた様子だが、

その表情も一瞬で、すぐに少々堅い営業スマイルへと戻った。

ジャックから見た店内は思ったよりも小奇麗に整理してあった。

やはり城門前のメインストリートに店を構える様な大きな店とは比べようも無いが、

特に大きな汚れも目立たず、パンを陳列してあるテーブルにも埃がたまっているような様子も無い。

窓が小さく、日光が余り入ってこないからか店内は少々暗く感じるが、不快に思う程ではない。

商品たるパンも、見た目の派手さは無いが、香ばしい香りを漂わせていた。

店の名前とは大違いだ。

ジャックはその中からチーズブレッドを二つ程取り、清算の為に店長へと振り返ったその時、

彼のすぐ後ろで木戸の開く音と、大きな女性の声が聞こえた。

「てーんちよ、また買いにきまし……ってあれ？」

どこかで聞いたことあるようなその声に、ジャックは木戸の方向へと振り返ると

そこには長いストレートの黒髪を風になびかせ、黒の瞳を大きく見

開いた少女が立っていた。

彼は彼女を知っている。

つい昨日、一緒にパーティーを組む事になった彼女、イリア・ソフ
イリアその人だ。

「あれー師匠もこの店しってたんですか？」

「あー、いや、初顔だ。ってか、師匠ってなんだ師匠って」

「いーじゃないですかー、呼ぶくらい」

「そう呼ばれるのが嫌だったんだっつー事くらい察しろよ」

「じゃーなんて呼べばいいんですか？」

「普通にジャックでいいじゃねえか」

「えー、なんか普通すぎですよ」

「呼び名に特別を求めるなよ……」

彼女との会話で、幼い頃に初めて入った森で飛竜の鱗を見つけた時
のようなドキドキ感

飛竜の巻き起こす風巻き込まれた羽虫の如く、あっという間に吹き
飛んだ。

やれやれと言うように大きく息を吐いて、店長らしい大男へと小銭
を渡す。

そのまま店内で一口齧る。

焼きたて、というには冷たかったが、しかし焼きたてかと思う程に
ふっくらとした食感。

小さく角切りにされたチーズの塩気が小麦の甘さを程よく引き立て
る。

アイルー達の作るパンも美味しいのだが、このパンも決して負けて
はいない。

彼らの料理が決して安いとはいえない値段なのに比べ実にリーズナ
ブルなのもうれしい。

「へえ……」

「ふふーん、美味しいでしょー」

その一口に一言漏らすと、何故かイリアが無い胸を張っていた。

彼女の姿に何か言おうと一瞬息を飲むが、その息は何も言わずに吐き出される。

さらに一口パンにかぶりつきながら、店内を再度見回った。あまりしつかりと見ていなかったパンの種類を見るが、種類はそれ程多くない。

イリアは何を買ったのかと見ていると、迷う事無くクロワッサンを手にとった。

ジャックの視線に気づいたのか彼へと振り向いてニヤリ。

「あげませんよ？」

「…そこまでがめつくねえよ」

「美味しいのにー」

彼女の手のひらにも納まりそうな小さなクロワッサンを4つ程抱えて彼女は清算を行う。

無言でクロワッサンを紙袋へと入れる店長らしき大男をパンを啜えながら見ていたジャックだが、

彼の背後から人影が近づいてきている事に気づいた。

身長は自分よりも少々小さい程度だろうか、暗がりの所為でよく見えない。

背丈だけを見ると男のようにも見えるのだが、いかんせん線が細い。背の高い女性か、もしくは優男か。

ジャックの思考するその数秒の間にその姿はしっかりと見て取れる程度には光にさらされていた。

正解は前者。

タイトなシャツとパンツ姿の女性。

長身に加え、出るところは出て引っ込むところは引っ込んでいるないうすばでー。

体にぴったりとくっつくような服装のおかげでよりセクシーに見える。

一言で言えばあれだ、ボンキュッボンという奴だ。

そんな女性の姿を見て、ジャックは軽く頭の中にあるアルバムへと

目を通した。

出てくるページには、まな板胸を嘆くリズイや、くびれの少ない腰をくねらせるリズイ、まるで子供のようなヒップを涙目で摩るリズイ、そして必死に背伸びをするリズイが居た。

(……差が出るもんだな)

しみじみとそんなことを考えていると、そのボンキュッボンな彼女と目が合った。

慌ててジャックは視線をそらす。

(どこの餓鬼だよ……)

咄嗟にやってしまった行動だが、自分の行動を振り返り自らにあきれた。

ちらつと視線を戻すと、彼女は未だにジャックへと視線を向けていた。

笑いを抑えるように口元が引きあがっている。見た感じ、自分よりも年上だろうと思われる。

年上と意識すると、からかわれている気がしてより気まずくなくなった。そんなジャックの気まずさを知ってか知らずか(おそらく知らないが)

イリアは元気いっぱい声を上げるのであった。

「あ、ローザさんこんにちは」

「よっ、こんにちは。いつも悪いね」

「いえー、おいしいですから」

「そー言ってもらえると旦那も喜ぶさ」

切れ長の眼をさらに細めて、彼女が笑みを漏らした。

イリアの肩越しにジャックへと再度視線を向けると、顎に手を当ててニンマリと

さつきとは違った笑みを浮かべる。

「剣の道に異性など要りません!とか言いつつ、ちゃっかりやってくるじゃない」

ジー。

ジャックの足の先から頭のとっぺんまで値踏みするように眺めるローザ。

誤解だと反論しようとしたジャックだが、先ほどの事もあり逃げるようにローザに背を向ける。

すると、彼の背負っていた大剣を目にし、ローザがほー、と声を上げた。

「蒼剣ガノトスねえ…そこそこって所か」

自らの持つ愛剣の種類を言われ、ジャックは目を丸くして振り向いた。

「んーハンターとしてはそこそこだけど、今ひとつ男前じゃないね」
(こいつ、ハンターか)

そう気づいてから、改めて確かめるように彼女の姿を見る。

左側の前髪が長く伸ばしてあり、左目をほとんど隠しているその髪型は、

女性ハンター達の中ではキリンテールと呼ばれている髪型だ。

多くのハンターは狩りに出かけている時は形振りかまわず、であるが、

意外と街での生活ではファッションを気に掛ける人も多い。

特に女性は職業柄、筋肉質になりがちな体格を気にしている人も多いようで、

そんな体格を補う形で服やアクセサリなどに気合を入れている人も少なくない。

中には狩りでの報酬のほとんどはファッションに消えるという人も居るようだ。

そこまでするなら素直に違う職業をしろと言いたい所だが、

そんな事を口にするハンターはおそらく世界中探しても片手で足りるだろう。

彼女はそんな女性ハンターの悩みを吹き飛ばすような体格をしている。

しなやかに伸びる褐色の手足は野性的な美しさを持っていた。街娘の様な淑やかさも、貴族の様な煌びやかさも持ち合わせていないが、

しかし荒々しく、力強く、そして美しい、例えるならば雌獅子といったところだろうか。

そのローザの前に居るイリアなど（彼女も彼女でけっこう綺麗な範囲に入るのだが）

彼女と並ぶとまるで子猫のようだとジャックは感じた。

気づけばその子猫が見えない尻尾を振りながら、ローザに向かって猫パンチを繰り出していた。

「もー、そんなんじゃないですよ。剣の師匠兼狩りの仲間です」

「師匠になつた覚えはねえよ」

「いいじゃないですかケチー！」

「うるせえ、それよりあんたハンターだよな」

ぶーぶーと不満を上げるイリアをあえて無視し、ジャックはローザへと視線を向けた。

「さあ、どこかね？」

「…まあ、どうでもいいけどさ」

ニヤニヤと薄い笑みを浮かべるローザ。

完全にかかわれてると確信したジャックは足早に店から出る。

彼の背後からイリアの焦る声が聞こえてきた。

「あー、待ってくださいよ！」

そのまま歩き去るつもりだったジャックだが、ため息をひとつついて店の前で立ち止まった。

振り返り、再度店を見る。

こじんまりとした店舗は改めて見てもパン屋に見えない。

店内ではイリアが慌てて小銭を取り出そうとして、ばら撒いていた。ギャボー！などと叫び声が聞こえてくる。

人相手に飛竜用の耳栓が欲しいと切に感じるというのはどうなんだろうと思いつつ、

よじやく会計を済ませたイリアが出てくるのを待つジャックであった。

2章 (3)

偶然あの店にたどり着いたジャックは当然のことながら帰りの道など分るわけもなく、

多少癩な部分もあつたが、イリアに道案内を頼んでいた。

非常に古い歴史を持つこのドータはこの地域では一番大きな街だ。

元々は小さな農村だったようだが、人が増え、家が増え、気づけばここまで大きくなっていた。

人が増えればそれに応じて建物を追加して建てていった、という経歴からか

町並みに計画性は皆無で、細く入り組んだ道が多い。

所謂、チェス盤の様にきつちりと区画分けされ、東西南北に道が伸びているような街と比べると

もはやそこは街というよりもレンガと石の森だ。

この街に生まれ育った人間であっても、町の全容を把握している人間はほとんど居ないだろう。

ましてドータに住み始めて5年程度のジャックなどは大通りから外れて5分も歩けば

現在地の把握が難しくなるだろう。

ハンターという生き方をするに当たってまず身に着けなければ成らない事のひとつに

何よりも現在地の把握がある。

意気揚々と狩りに出向き、飛竜討伐に成功したが、キャンプに戻れませんでした。

そんな自体になれば目も当てられない。

ハンター歴5年のジャックとて、当然方向感覚は十分に養ってある、ある、が。

この街はとにかく複雑なのだ。

向かうべき方角を把握していたとしても、道が素直にその方向に進

ませてはくれない。

南に向かうべくその方向へ進むと、いつの間にか北西方面に進んでいたりする事もある。

このレンガの森は方向と現在地の把握に加え、進むべき道の選択が非常に重要ということだ。

イリアはしつかりと道を覚えているらしく、十字路や丁字路に差し掛かって迷うことなく

道を選択し、ジャックを先導している。

道は狭く、3人が並んで歩くのが精一杯だ。

今現在、ジャックの背には巨大な刃がぶら下がっているが故に2人だけでもギリギリだったりもするが。

そんな大荷物を持つジャックは先ほど買ったチーズブレッドを

歩き出して早々に胃に収め少々手持ち無沙汰。

対するイリアは小さなクロワッサンをチビチビとつまみながら歩いている。

歩き出してから少々経っているが、それまではパンの味であったりあのパン屋の話であったりと取りとめも無い話をしていた2人だが、

「そーいえば」

と、ジャックが話を切り出した。

「次の依頼なんだけどな」

「もう決まったんですか？」

「いや、まだ決まっては居ないんだけどさ、お前の实力を見るってのも踏まえて

クックかゲリヨスか…まあその辺にしようと思うんだが」

「はい、あたしはかまいませんよ」

「ま、ギルドカードを見る限りはリオ夫妻程度なら問題ないだろうとは思ってるんだが、一応な」

「ふふーん」

ジャックが軽く肩をすくめて話している時、その隣でイリアはニヤニヤと笑みを浮かべていた。

視界の隅でそれを見たジャックが眉をひそめてため息。

「…なんだよ、妙な笑い方して」

「なんかなんかー、弟子入りって感じじゃないですか」

「またそれか…いい加減諦めろよ」

「あたしは諦めませんよーだ」

トトツと小走りにジャックの数歩前へと駆け振り向いて、腰に手を当てて前かがみ。

軽い上り坂になっていた道、イリアが上から見下ろすような形になった。

「師匠がだめーって言ってもあたしはそのつもりですしっ」

「…ったく」

「ふっふーん」

踵を支点にくるつと方向転換。

ふわつと長い黒髪が浮き上がり、差し込む日差しにキラキラと輝く。そんな姿を見ていると到底ハンターには見えない。

その辺の年頃の若娘、そんな感じだ。

ハンターなどという無骨で危険極まりない職よりも、違った職に着いたほうが

彼女の魅力というか、能力というかを発揮できるんじゃないだろうか。

そんな事を思いつつも、ジャックは決して口には出さない。

トン、トトン、と踊るようにステップを踏み歩くイリアの後姿をまぶしそつに目を細めて見るだけなのだ。

2章 (4)

その日、試験的にという話ではあったが、念願のジャックのパーティーへと参加をする事が出来たイリアはパーティーリーダーのジャックに呼び出され、ハンターギルドへと足を運んでいた。

彼女の歩くドータの街は非常に大きな街だ。

ハンター関連のみならず、交通や物流、金融、宗教：さまざまなもの集合する場所である。街を行く人々も行商人から司祭まで幅広い。

黄色と黒のストライプが入った少々キワドイ防具を着た笛使いのハンターが、道端で熱心な宣教師に神の尊さを説かれ困惑している脇をすり抜け、大通りに面したいつもの木戸へと歩み寄る。

木戸を開けようと手を伸ばした時、後ろから人の掛けて来る音が聞こえてくると、イリアはすっと体を右に半歩ずらした。

そんなイリアの脇を砂埃で汚れた男があわてた様子で木戸を押し開けて中へと入っていく。

ハンターへの依頼は急を要するものも少なくは無い。

イリアは別段気にすることもなく、ゆらゆらと揺れる木戸を押さえ、男に続いて建物の中へと入っていった。

入り口で喧騒の中を右へ左へと視線を泳がせれば、目的の人物を見つけるのはそう難しいことではなかった。

一部のハンターに「双頭の火竜」と呼ばれつつある2人組み。

2人の座る店の奥にあるテーブルへと歩みを進めると、向こうもそれに気づいたようで軽く手を振ってイリアを迎え入れた。

2人の前にはそれぞれ、分厚いステーキの乗った鉄板と、色とりどりの野菜が盛られた皿が置かれているが、あまり減っていないところを見ると2人も着てから間もないようだ。

イリアも背のずっしりと重い太刀を下ろし、テーブルへと付いた。

「とりあえず、お前もなんか食うか？」

やや肉質が硬く、筋張った感が否めないアプトノスという草食竜の肉をカチャカチャと切り分けながら、ジャックが声をかける。

時間的にはまだ昼には早い時間だが、一人何も食わずというのモイカがなものとイリアも店のメニューを思い起こした。

「そうですね、いただきます。こっちにシモフリトマトのリゾット一つ！」

まだ太陽も昇りきっていないというのに、店の中は多数のハンターで賑わっている。

忙しそうに店内を駆け巡るウェイトレスへと大きく手を振りながら注文を伝えると、了解した、という意味なのか空になっているお盆をぶんぶん振り回し、カウンターの奥へと小走りに入っていた。リゾットであれば時間をかけずに作れるはずだ。あまり空腹でもなく、後から席に座ったイリアにとってはちょうど良い。

「さて、イリアも来たことだし始めるか」

硬い肉質のステーキを噛みつつ、ジャックは手に持ったフォークでカウンターを指す。

「今回は様子見って事で、あんましキツイのは受けないつもりだ。

レイアあたりが無難なんだが、ここしばらくはレイア討伐の依頼は無いみてーだな。」

レイア：正しくはリオレイア。

ジャックの防具に使われているリオレウスと同じ種類の飛竜の雌にあたる。

多種にわたる飛竜の中では比較的討伐が容易な部類に入るといわれるが、

そのポテンシャルはイャンクックなどは足元にも及ばない。

油断すれば、ジャックとリズィですらあっけなく餌になるだろう。

「本当はこの間も言った通り、クックかゲリヨスか、その辺にするつもり…だったんだが…」

言いよどんだジャックが苦い顔と共に視線を向けた先には、満面の笑みで手を振るマリーアの姿があった。

話によれば、ここ数日で新人のハンターが多数ハンター登録を済ませたらしく、飛竜討伐入門ともいえるクックやゲリヨスの討伐は若いハンター達に回してしまっただけらしい。

マリーア曰く『ハンターは常に人手不足なのよー？ちょっとは新人教育に協力しなさいねー』だそう。

「次の依頼が来るのを待っててもいいんだが、この調子だとしばらくは他にまわされるだろうからな。」

ギルド側が依頼を受けるハンターに介入するというのは滅多に無いことだが、逆にそれはこの二人がマリーアから信頼を得ている事に用いてイリアは感じた。

一通りの説明が終わるとほぼ同時、タイミング良くイリアの頼んだリゾットが運ばれてくる。ジャックの目の前においてあるステーキの香ばしい香りに負けないくらい、トマトと香草のさわやかな香りが彼女の鼻腔をくすぐる。

……おいしそう。

「まあ、そんなわけだから、もう少し上のフルフルかバサルかその辺に……て、聞いてるか？」

「え、あ、ハイ、聞いてます。」

実はイリアの頼んだシモフリトマトのリゾット、彼女が頼んだのは初めてだった。

リュウノテールやキングトリュフのような最高級食材には程遠いが、シモフリトマトもなかなか高級な食材に入る。

二人の手前、ちょっと見得を張って見たイリアだったが、これは実においしそう。

思わず生唾を飲み込んでしまいそうで、んほん、と小さく咳払いを試してみた。

「あー……、まあとりあえず食ってからにするか」

「あ、いえ、大丈夫ですから」

ものほしそうにしていたのがばれてしまったらしく（というかバレバレだったのだが）、あはは、と苦笑を浮かべる。

ジャックへと話の続きを、と口を開きかけたところで、今まで無言だったリズイが先に口を開いていた。

「リゾット、冷めると美味しくないから」

そういうと、野菜の山にフォークを突き刺し、もしかもしかとやり始めた。

もしかもしかもしかチャッもしかチャッもしかもしかもしか。

途中チラチラとイリアを見るのはやはり『早く食べ』ということだろうか。

少々強引なその気遣いに感謝しつつ、イリアもスプーンを手にするのだった。

一口目から食べ終わるまで彼女は自分が何をしていたのか良く覚えていなかった。

気づくと目の前には空っぽになった皿と少々呆れ顔のジャックと、相変わらずな無表情なリズイがあった。

覚えているのは、トマトの酸味と香草の香りと、出所不明なしつこくない甘さだけだ。

当然ながら料理に詳しいわけではないイリアがその甘みの出所をつかむ事は出来ないが、

もしその甘みがシモフリトマトのものだとしたら、このシモフリマトというのはとんでもないトマトなんだと言う事だけはわかった。材料に使うだけでこれだけ美味しいトマトだ、そのままかぶりついたらどれ程のものか：考えただけで涎が出る。

「……涎拭け」

実際出てたらしい。

赤面しつつあわてて口元をぬぐうイリアを、ジャックは苦笑共に、リズイは口に詰め込んだ野菜をもごもごしつつ眺める。

そんな二人の様子にイリアは自分自身でも分かるほどに顔面真っ赤にしていた。

「まあ、落ち着いたみてーだし、話を進めるか。次の目標なんだがどうす」

「ジャックくーん」

漸く本題が始まったところで中途半端にさえぎられたジャックが表面を浮かべて、さえぎった声の主、マリアアへと視線を向けた。

「…どうしたよ？」

ジャックの問いにマリアアは笑顔のままちよいちよいと手招き。

また後で、とでも言うようにジャックは軽く手を振って答えるが

「ジャックくーん？」

再度マリアアの呼び出し要求。笑顔である。実に良い笑顔である。

ドーラのハンターギルドに籍を置くものであれば、あの笑顔の真意が分からぬ者は居ない。

はあ…と大きなため息をつき、ジャックが席を立つ。

「わり、ちよつと行ってくる。適当に次の目標の話でも……いや、いい。とりあえず待っていてくれ」

基本的に無口なりズイとパーティー参加初日のイリアでは話が進むわけが無い。

マリアアの話が終わるまでは相談も中断するしかないだろう。

面倒くさそうな足取りでカウンターへと歩いていくジャックの後姿を苦笑しつつ見送るイリアは、ジャックの更にその奥、カウンターの前に居る人物に目が行く。

（あれ、さっきの？）

入り口ですれ違ったただけなので確証は無いが、あの汚れ具合に背丈は先の人物に良く似ていた。

基本的によほどのことが無い限り依頼主は誰でも、というのが大抵のハンターの考え方であるが、イリアもそれにもれず特に気にする様子もなく、マリアアと会話を始めたジャックを一瞥してテーブルへと向き直った。

が、テーブルに向き直ったところでやることは無い。

自分の皿は見事に空になっており（しかしまだ良い匂いが残っている　おいしそう）手持ち無沙汰という奴になってしまった。

何か会話の種類でも…とちらりと斜め前を見るとリズイの皿にはまだ3割ほどの野菜が残っていた。

小柄な体に似合ってたか、食べるのがあまり早くないようだ。

「…えと、リズイさんて」

「ん？」

「ベジタリアンなんですか？」

「…肉も食べる」

「そ、そうですね」

注文主が居なくなってしまったジャックの鉄板へと視線を向けると、メインのアプトノスの分厚い肉はなくなっていたものの、付け合せのミックスビーンズだけはまるまる残っている。

「…えっと、師匠ってその」

「ん？」

「ミックスビーンズ、嫌い、なんですかね？」

「ん」

「……」

「……」

「リズイさんは何か嫌いなものとかありますか？」

「…特には」

「私はオンプウオがダメなんですよ」

「…そう」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……し、師匠って、その、えと」

「？」

「あ、そ、そう、なんで太刀使わなくなっただんですかね？」

「…知らない」

「そ、そうですね！あ、あはは」

（ま、間が持たないよ！助けてサンダーソン！）

今まで対峙したどんなモンスターよりも強力強大凶悪な相手にイリアの頭がパニックを起こし始めた時、

「…なにやってんだお前」

頭を抱えて悶絶しているイリアを冷ややかな眼で見つつジャックが帰ってきた。

「えっ、あっ、いや、あ、ははは…」

一瞬怪訝な顔をするものの、状況を察したのか苦笑をイリアへとむけ、彼も元居た椅子へと腰掛ける。

「で、次の依頼なんだけどな…」

2章 (4・5)

しとしと降り続ける雨は密林特有の高い湿度による不快指数を更に上げ、生い茂る木々の隙間からこぼれてくるはずの日の光は厚い雲のが独り占めしている。

水分を得てぬかるんだ腐葉土の大地は慣れない者の体力をそぎ取っていく。

周囲に居る人影は6。

傷一つ無く終わらせてやる、と豪語していたハンターは今頃奴らの胃の中でグズグズの肉塊に成り果てているだろう。

唯一の牙を失った我らに自然に歯向かう力は無い。

今はただ、この無限にも思える時が過ぎるのを待つしかない。

2章 (5)

ギルドの手配した小船を降りるた先は見慣れた船着場。

先に下りた蒼と赤の背中を見つつ、イリアは依頼の内容を思い起こしていた。

ジャックが受けてきた依頼は「消息を絶ったキャラバンの搜索、救出」というもの。

街から街へと渡り歩き、各地の特産品などを売り買いするキャラバンや商人は物流の上で非常に重要な位置に居る。

彼らに対する報酬は多額になるが、それと比例するように危険度も高い。

今回のような搜索願ひも珍しい依頼ではない。

特に鮮度が重視される食品類は危険と分かりつつも時間を惜しむために、ハンターギルドの指定している危険地域に足を踏み入れる事も少なからずあるのだ。

今回も麦を専門に取り扱うキャラバンが搜索の対象だそうだ。

比較的南に位置するドータでは北方で取れる良質なウォーミル麦が良い値段で売れる。

良い値段で売れるということはそれだけ経済への影響も大きい…らしい。

ハンターである3人にはその辺の経済事情など分かるはずも無いが、唯一分かっていている事がある。

それは、キャラバンの連中が今頃海よりも深く後悔してるか、人とも知れなくなつた形で蟲どもの温床となっているかのどちらかだ、という事だ。

「お、無駄に色々入ってんな」

小船の直ぐ近くにある青い箱を覗き込んだジャックが「そこそと中を物色している。」

基本的にハンターの使う物資は彼らが自腹で購入するのだが、必要

最低限の物資は依頼主から支給されるとというのが通例になっている。大体は人数分の回復薬や、腹が膨れるだけの固形食糧、そして小さな砥石だけなのだが、

今回はそうでもないらしい。

「シビレ罨に大タル爆弾：お、閃光玉もあるじゃねえか随分と豪勢だな」

「…拡散弾もある」

「まあ、そこまで重装備で行く必要もねえだろ。とりあえず閃光玉はいただいて…」と

「…拡散弾と榴弾、持っていく」

「別にかまわねえが、持ちきれねえだろ」

「……うう」

「……わーったわーった、俺が持つてくからよこせ」

「ん」

そんな二人のやり取りを尻目に強張った表情のイリアが向かうべきであろう密林の奥地を見つめていた。

そんな様子に、道具袋へと弾を詰め込んでいたリズイが気づき、ジャックの赤い甲殻に覆われた胸を叩く。

「ん？どうした」

「…あれ」

「ああ……イリア、何かあったか？」

ジャックに呼ばれ振り向いたイリアは、先ほどの様な強張った表情は無く、いつも通りの子猫のような人懐こい笑顔をジャックへと向けた。

「いえー、所で準備OKですか？」

「ああ、こっちはな。お前はどうかんだ？」

「あたしはもう船に乗ってる時から準備OKですよっ」
ぐっと力瘤を作るようなしぐさ。

「わかった。んじゃ飯食ったらいくか」

持参した生肉と肉焼きセットを取りに船へと歩き出すジャックの後

るから驚いたような声が届く。

「え、直ぐに出るんじゃないんですか？」

その声に振り返らないままジャックは片手をあげ

「落ち着けて。急いで失敗するのは搜索予定のキャラバンだけで十分だ」

「で、でも」

「空腹の所為で満足に動けませんでした、なんて末代まで笑われるぞ？」

「…言い方が親父臭い」

「ほっとけ」

「それは…そうですね…」

納得してない様子のイリアを尻目に慣れた手つきで肉焼きセットを設置し、火を起こすジャック。

「ま、お前の言い分も分からなくてもない、けどな…上手に焼けたと」

どういう構造なのか、ハンターご用達の肉焼きセットはわずかな時間炙るだけで生肉が外はこんがり、中はジューシーな肉へとはやがわりする。

もつとも、少しでも火から上げるのが遅れると真っ黒に焦げてしまっただけだ。

こんがりホカホカな肉をイリアへと投げると、新しい生肉をセットする。

「搜索する側がやられましたーじゃ話になんねえだろ…上手に焼けてました、と。ほれ」

「ん」

イリアに続き肉を受け取ったりズイが豪快にかぶりつく。口の周りに滴る肉汁がつくのも気にせずガツガツ、と。

サラダをゆつくりと食していた数日前の姿は今のズイからは想像もできない。

「同じパーティーの仲間だしな、意見言うのは良い事なんだが、そ

「…というのは出発する前、だな。上手に焼けましたっ」と

最後に自分の分にかぶりつくジャックの姿を見てから、イリアもお
ずおずと肉を胃に収めていく。

特に調味していはあるわけでは無いので特別旨いと感じる事はないが、
空腹を満たすには十分過ぎるポリウムはある。

支給品の固形食糧などには無い満足感が体を満たしていく。

「搜索する側が失敗したら、例え今、生き残っているとしても、次
の搜索が来るまでに生き残れる可能性は0に近い。多少遅れても真
っ先にたどり着いた俺らがしっかかりと搜索してやるのが一番の近道
なんだよ」

「わかり、ました」

「ま、焦る気持ちは分かるさ。食ったらさっさと搜索に行くぞ」

「…はい！」

悩んだり、焦ったり、落ち込んだり、立ち直ったり、ころころと変
わるイリアの顔を見てると飽きないな、とジャックは感じた。

サラダを食べていた時とは比べ物にならない速度でこんがりと焼け
た肉塊を胃に収めたりズイへとちらつと視線を向け思う事は、

(リズイは殆ど表情かえねえからな…)

「…ん？」

「食ったら行くぞ」

「ん」

ジャックも食べ終わった残りの骨を投げ捨てるのと巨大な大剣を背負
いなおし、緑に覆われる密林へと視線を向けた。

2章 (6)

視界の正面は緑の木々。

視界の下には茶色の大地。

視界の上には緑の木々…の隙間から黒雲が覗く。

シトシトと降り続ける雨が鎧の中のインナーを肌に張り付かせて不快極まりない。

先頭を歩くジャックはぬかるんだ足元をもるともせず、普段の歩調と変わりなく歩いていく。

その後ろに続くリズイは、ジャックに比べると歩幅が狭いにもかかわらず前に行くジャックにしっかりとついていっている。

普段はさらさらの長い髪もこの雨の中では邪魔な重荷でしかなく、鬱陶しく首筋に張り付いた髪をかき上げつつ、イリアも二人に遅れを取らぬように歩を進めた。

3人が搜索に当たった場所は密林と呼ばれる、その名の通り緑に覆われた未開の地だ。

一言に密林と言ってもその範囲は非常に広範囲にわたる。

ある程度人の手が入った場所は比較的安全な場所として、今回のように危険を顧みない行商人が交通に利用したり、登録したてのハンターが密林特有のキノコを採取したりする。

がしかし、その地から一步奥に踏み出せば一流のハンターですら緊張を感じる一級の危険地帯へと変わる。

彼らは今、その中間あたりを歩いていた。

「…ふう」

ぬかるんだ腐葉土の歩きづらさと、張り付くインナーの不快感でイリアの口から思わずため息が漏れる。

「どした？もうばてたか？」

それほど大きなため息で無かったにもかかわらず、ジャックの耳にはしっかりと入っていたようだ。

歩調を緩めて振り返る。

「い、いえ、そんな事ないですよ」

あわてて首を横に振るが、これは事実だ。若輩とはいえ、イリアも立派なハンター。この程度のことでは様なやわい体はしていない。

が、そんな彼女の返事を聞いているのかいないのか、ジャックは完全に足を止めてしまった。

「ま、この辺で1回休憩しとくか。聞いておきたいこともあったしな。どつかいい場所は…」

「あ、いや、私は大丈夫で」

「あれ」

「お、ナイスだリズイ」

辺りをきよろきよろと見回すジャックに対し、リズイが指差したのは小さな岩陰。

二つの岩が重なり合って、上に乗った岩が丁度ひさしの様にせり出している。

流石にキャンプをするには狭いが、3人が座って休憩するには十分な広さだ。

場所を確認するや、さっさと歩き出すジャック。そしてその後ろに続くリズイ。

ざわつとわずかに首をもたげた感情を押し殺して、イリアが声を上げる。

「あたしはまだ大丈夫です！」

思わず荒げた声にジャックが足を止める。が、

「それはわーっただって。休憩するのはこっちの都合だから、さっさと来いって」

振り返ることすらせず、肩越しにひらひらを手を振った。

嘘だ！

イリアはそう確信する。

まだ歩き出してさほど時間は経っていない。

確認事項があるのであれば、こうして歩き出す前、そう、肉を食べ
ている間にも確認すればいいのだから。
気遣われている。

つまり、自分はまだ一人前ではないと、見くびられている。
知らずうちに、イリアはギリツと奥歯をかみ締めていた。

「わかりました」

ざわざわとざわめく心を何とか鎮め、イリアの彼らの後を追う。

女性陣が小柄（特にリズイ）だからか、思ったよりもスペースに余
裕があった。

ジャックを中心に左右にイリア、リズイと並び、中央のジャックが
徐に地図を取り出した。

「聞いておきたいことってのは1つだけだ」

両脇から地図を覗き込むように二つの顔がジャックへと迫る。

場所が場所でなければ女性の柔らかな肌と、甘い香りにムフフとし
たくなる状況なのだが、

今は鎧越しの硬い感触と、草と土の生臭さしかない。

ジャックが生物の本能としてそんな願望を一瞬浮かべるが、全く色
気の無い自分の周りの現実に意識を戻す。

「何処に向かうか、だな」

「え？」

唐突な、そしてイリアにとっては予想外な問いに彼女自身さえも情
け無いと感じる声を上げてしまった。

「…そんな変な質問だったか？」

ジャックにとつてもイリアの反応は予想外だったのか、怪訝な顔を
して頬をぼりぼりとかく。

「あ、いや、その…」

（だって…）

「だって、師匠、どんどん進むからってつきり、もう、決まってるの
かと…」

そう、思っていた。

大まかな地図があるとはいえ、この広大な密林でめぼしもつけずに散策するのはまさに無謀といえる。

「ああ、とりあえず出発してから決めようかと思ってたからな」

「そんな…行き当たりばったりな…」

「そうか？」

「そうですね！！」

あまりに暢気なジャックの答えに思わず声を荒げてしまふイリア。彼女の剣幕に上半身仰け反りつつも、やはり焦った様子は無く右手でイリアをなだめるように。

「まあまあ、落ち着け。今から決めればいいじゃないか」

「そ、そんな…」

イリアは今回の最終目的を思い出す。

遭難したと思われるキャラバンの捜索、ならびに救出。

シトシトと雨の降り続ける密林は、そこにいるだけでハンターでさえ体力を徐々に奪われていく魔境だ。

そんな中に一般人が助けを待ち詫びている光景を、彼女は否応でも想像してしまった。

「そんな…そんな事してる時間はないですよ！！」

声と共に立ち上がり、ポカンとしているジャック、相変わらず表情の変わらぬリズィを上から見下ろしながら、ジャックの持つ地図の一部を指差す。

「キャラバンの通りそうなどころなんて決まっています！そこを重点的に捜索すればいいじゃないですか！」

指差した場所は恐れを知らぬ商人達が通行に使う経路だ。

密林を通るならば9割はここを通るはずの場所。イリアとしてはここに間違いないと確信に近い予想を立てている。

己の持つ地図の指された場所を見て、ジャックがふむ、と一呼吸置く。

「そうだな、その辺を通ったのは間違いないだろう。しかしだな」

「しかしも無いです！！早くしないと救出できるものもできなくな

「つちやいますよー!!」

「いや、だから…。お前少し落ち着け」

「あたしは十分に冷静です!!」

明確に拒否はしていないものの、自分の意見を聞いてくれるつもりはジャックには無いようだといリアは感じる。

ざわざわと湧きあがる感情を止めるのは、もはやイリアにはできなかった。

「もう…いいです!!私一人でも先に行きます!!お二人はここでじっくり考えていてください!!」

「お、ちよ、待てて」

制止するジャックの言葉を見無視して、イリアはきびすを返し岩陰から飛び出す。

後ろでジャックが何か言っているのは分かったが、自分の駆ける足音で良く聞き取れなかった。

降り続ける雨は、なぜか岩陰に入る前よりも余計不快に感じ、イリアは苛立ちを感じるのだった。

2章 (7) (前書き)

今回は良い切れ目を見つけられなかったので長いです。

2章 (7)

ジャックとリズイの二人と別れてから、イリアは彼らに宣言した通り商人達が通行に使う経路へと足を運んでいた。

雨は徐々に強くなり、数歩進むと自分のつけた足跡すら良くわからなくなる状態となっている。

二人と別れてからしばらく経つが、未だにキャラバンの足取りすらつかめないという現状に加え強くなる一方の雨足に、イリアの心には徐々に焦りという言葉が湧きあがってきていた。

(早くしないと……)

知らず、ギリツと奥歯を強く噛み締める。

相変わらず視界に見えるのは緑の木々とぬかるんだ腐葉土だけ。

密林全体へ強く振り続ける雨のおかげで彼らの進んだ形跡も全て洗い流されているようだ。

進んだであろう経路から彼らの足取りをつかみ搜索するつもりであったイリアの目測が見事に崩された事も、イリアの焦りを加速させる要因になっていた。

(この辺から移動したはず…なのにつ！)

焦る気持ちとは裏腹に手がかりは一切つかめず、また焦りが彼女の体力を確実に削り取っている。

何度か休憩をしようとしたものの、彼女の脳裏に浮かぶ最悪の光景が彼女の体を休ませることは無く、ただひたすらに足を動かしてき

た。結果、腐葉土の大地を踏みしめる足取りも徐々に重いものへと変わっていた。

不意に、彼女の耳が己の足音と雨音以外の、何かの音を聞き分ける。何かが多数、近づいているような、音。

歩みを止め、辺りを見渡す。

視界、360°は全て緑、緑、緑、緑……青。

密林の木々の中に不釣り合いな寒色を認識したイリアは背に担いだ太刀を抜刀、更に背後へ振り返るように横一閃する。

体にまとわりつく雨粒を辺りへ撒き散らしながら、水気を含み重みを増した長い黒髪をふわりと浮かび上がらせながら、鋭くその場で360°ターン。

『ギヤアアアアアア』

背後からイリアへと密かに飛び掛っていた青の獣が胴と首を分断されてその場に落ちた。

青の断末魔と共に、彼女の周りに点々と青の群集が現れる。

ランポス。

主に密林や樹海に生息する肉食の小型鳥竜。

同じ鳥竜種のイヤンクックに比べると大きさはその1/5程度であるが、群れを成し集団で襲い掛かる狩猟方法は時に屈強のハンターですら苦戦を強いられる。

イリアの周りに姿を見せたランポスの数は軽く見積もって10前後。彼女の愛刀、鉄刀>神楽くについたランポスの血を一振り飛ばし、イリアは深く呼吸をする。

ジリジリと彼女を囲う円周を小さくするランポスに対し、顔の横に太刀を構えなおし、発気。

「ハアツ！」

囲まれた状況で待ちに入るのは得策ではない、と判断したイリアは正面に対峙するランポスへ向けて駆け出す。

突然の突撃に動揺するランポスへと素早く接近し、構えた太刀を直線的に突き出す！

安価ではあるものの、防具に流用される程のランポスの鱗を銀色の

刃が易々と貫いた！

ビクンと一瞬痙攣して声を上げる間もなく1体が絶命する。

それに反応するようにイリアの後ろにいた1体が大きく跳躍、イリアへと飛び掛る。

突き刺した太刀を引き抜く動きを止める事無く、180°ターン、斜めから振り下ろす軌道を描き飛び掛ってきたランポスをばっさりと断つ！

続けざまに左右のランポスが飛び掛ってくるが、大きくバックステップを踏み回避した。

ランポスの一団とある程度の距離を置いて、再び顔の横へと太刀を構えるイリア。

波状攻撃を難なく避けられ、さらに仲間も2体屠られたランポス達はジリッとわずかに後退する。

ゆっくりと距離を縮めるイリアに対し、1体が飛び掛ろうとしたその時

タアアアアアーン！

と、遠くからの砲撃音が響く。

その音にランポス達は周囲をキョロキョロと見回し始めた。

好機、とイリアが駆け出そうと足に力を込めたのとほぼ同時、ランポス達は一斉に駆け出してしまった。

人の駆けるより格段に早い奴らは瞬く間に密林の木々の隙間へと消えていった。

暫く警戒態勢のまま、辺りを見渡し、耳を澄ますが、奴らの気配を感じる事は出来ない。

「…ふう」

吐息と共に構えを解き、太刀を背へと納める。

「あの音…ヘビィボウガンにしては音が小さい…かな」

おそらくランポスが消える原因となったであろう銃声のする方向へ

と視線を向けるイリア。

一緒に…今は別行動しているのだけれども…やってきたリズイが扱っているのはヘビィボウガン。

先ほどの音はどちらかと言えばライトボウガンの音に近かった。

「他に誰か…あ」

気づく、彼女らの他にボウガンを所持している可能性のある者達がいることを。

大きく一步を踏み出して、彼女は駆け出す！

駆ける！

飛び散る泥を気にも留めず。

駆ける！！

すり抜けた枝に頬を切り裂かれようとも。

駆ける！！！！

ただひたすらに、駆ける！駆ける！！駆ける！！！！

目的地は確定した。

後はその場にたどり着くだけ。

行く手を塞ぐ木々を強引にすり抜けながら、休むことなく駆け続けるイリアの視界が一気に開ける。

木々を抜けた先には岩山に開いた大きな洞窟があった。

足を止め、膝に手をつき呼吸を整えようと視線を下に下ろすと、多数の足跡が見つけられた。

強い雨に降られつつもまだ形跡を残す足跡。まだ、時間が経っていない！

足跡はまっすぐに洞窟の中へと続いている。

「はあ…はあ……………ふっ！」

荒い呼吸を無視するように強い呼気を放ち、上体を上げる。踏み出した足は、軽い。いける。

足跡を追いかけるようにイリアは洞窟へと再び駆け出した。

一瞬の暗転。

光の届かぬ洞窟に目が慣れるまで数秒の空白。

徐々にはつきりとしてくるイリアの視界に入る光景が ある種予想していたものでもあったが それでも彼女の心を大きく揺さぶったのは確かだった。

洞窟の隅で馬車を盾にするように隠れるキャラバンの商人達。

それを取り囲むランポスの群れ。

ドクン…

鼓動が一段階ギアを上げたのをイリア自身も感じ取る。

ハンターたる者、常に冷静であれ。

どこかの有名なハンターが残した言葉で、彼女もそれを身に染みている。

身に染みている、が、滾る衝動を抑える事は今のイリアには出来なかった。

「はあああああああ！！！」

キャラバンを包囲し、彼女に背を向けるランポスの一団へと雄たけびを上げて、真っ直ぐに突撃する。

突然の襲撃者に反応できず、棒立ちのランポス1体を抜刀のモーシヨンのまま袈裟切りに切り倒す。

連続、ようやく反応し振り返った左右の2体を、横薙ぎに太刀を振るい1回転でしとめる。

事態に気づいた1体が雄たけびを上げ、いくつも目が瞬時に彼女へと突き刺さった。

素早く体勢を整えると、雄たけび半ばに飛び掛るランポスに対し回避行動。

ざりつと雨に濡れず乾燥した地を強く踏み込み、飛び掛るランポスの下を潜り抜けるように前転。

雨に濡れた黒髪をランポスの爪が僅かに削り、ハラハラと散る。

着地、膝立ちの状態から立ち上がると共に反転、その勢いに乗せ逆袈裟に太刀を振り上げれば、仕留めるはずだった相手からの背撃に気づく事なく青の鳥竜が崩れ落ちた。

更に続くランポスの波状攻撃。

左右からの跳躍、挟撃。一瞬で間を詰める駿速の攻撃：だが、所詮直線的な攻撃に過ぎないそれを回避するのはルーキーといえど難しいことではない。

先ほどと同じように前転、回避。彼女の背後で地を爪が薙ぐ音が響く。回避後にやることは同じ、反転、切り上げ、一連の動作はもはや脊髄反射に近い。

深く思考するまでもなく、彼女はその反射的動作を実行。

…失敗。

反転すべく踏み出すはずだった右足がカクンと折れる。

一度折れ曲がった膝は直ぐには復旧してくれず、ペタンとその場で尻餅をついてしまう。

(え、あれ)

一瞬の思考停止。反射に従い動き「次」を考えていたイリアへのアクシデントは経験未熟な彼女に小規模な混乱を引き起こすには十分なイレギュラー。

あわてて右足の復旧作業を命令するが、体は拒否する。

動かない。

思考の切り替えは瞬時に、右がダメなら左、と左足へと回避行動を命令…エラー。

動かぬ両足に彼女の混乱は更に悪化する。

(え、うそ、なんで)

状況の把握、対策の考案、纏まらぬ思考で時間の停止した彼女がそれに反応できたのはハンター故の生存本能の賜物か。

足に頼らぬ咄嗟の回避行動、地をゴロゴロと転がってその場を緊急離脱。

背後に着地したランポスの1体が彼女の背後へ向けて鋭い爪を備え

る前足を振り下ろしていた。

状況の把握を継続、ゴロゴロと転がる体を仰向けに停止させ…目の前に突如として、直撃すれば装甲の上からといえど致命傷となる刃を剥いたランポスが迫っていた。

咄嗟に右腕に握り締めていた太刀で刃を防ぐ。

が、呆気なく愛刀は弾かれ、全く力の入らぬ彼女の手から離れていった。

太刀で軌道をそらされた刃は彼女を体を貫く事はなかったが、イリアの両腕を踏みつけ、完全に固定した。

まるでおもちゃを取られた子供の様な、「返してっ！」と駄々をこねて叫びたいという衝動が首をもたげる。

「う、く…」

完全にホールドされた両腕は一切動く気配がない。

何とか状況を打開すべく行動を起こすも、そもそも体に力が入らない事に気づく。

まるで大地に貼り付けにされた死刑囚。

相手が何も出来ないと知るや、ランポス共は勝ち誇った声を上げ、これから得られるであろう大量の食料に歓喜しているようだ。

そして唐突に実感。

そっか、ここまでなんだ、と。

ドータの平々凡々な商人の娘として生まれ、苦い経験を通じあの人を知り、ハンターを目指し、追いつこうと必死に駆け足で階段を上ってきた。

狩りをこなし、報酬を得て、稀代のホープなどと呼ばれ、自分は強くなったのだと思っていた。

あの人に、着実に近づいているのだと思っていた。

それがこの様だ。

あたしの人生はここで終わる。

新人のハンターでさえ、注意してかかれば問題のないはずのランポ

スに。

おそらく飛竜種が残した獲物の骨と、食い残しを苗床としたキノコの群生に囲まれたこの場所で。

救出するはずだったキャラバンの一行を目の前にして。

動けなくなる程に疲労していた体に気づくことが出来なかったという自分のミスによって。

あたしの人生はここで終わりにされる。

自分の体を押さえつける青を見る。

大きく裂けた口から細かな牙が見え隠れし、己の最後をいやおうなしに想像してしまう。

その牙を己の喉笛に食い込ませればそれで終了。

実に簡単すぎる想像で、思わず苦笑を浮かべてしまった。

そしてそれが現実になる。

勝ち鬨をあげていたランポス共が雄たけびを止め、ぞろりと不揃いな歯をこれみがしに獲物へと見せ付ける。

と、同時。

ガウウウウウウウウン！

小さな空洞の中に響き渡るヘビィボウガンの炸裂音。

そしてコンマ何秒の差で目の前から聞こえるドシュツという、スイ力を棒で叩き割ったような音。

大きな銃口から放たれた銃弾は、今まさにイリアへと死の宣告を行おうとしていたランポスの皮を切り裂き、延髄を粉々に砕き、一つであった頭と胴を別のモノに変えた。

ポタポタを雨の様な赤を身に浴びつつ、イリアはその銃弾の飛来した先をゆっくりと首を回して見つめた。

洞窟の奥、暗がりの向こうから再び砲火。

薄暗い洞窟の中、うつすらと大きな銃口を構える人影が見てとれた。

その小さな人影の放つ精確無比な砲撃が1体のランポスを貫き、さらに貫いた弾は勢いを殺すことなく、その先にいたランポスまでもを昏倒させた。

加えて、暗がりから小さく大きな砲撃手からの援護を受け大きな影が一直線に駆け込んでくる。

砲撃に加えて新たな突撃手の登場で戸惑うランポスの群れ。

しかし、先ほどのイリアの突撃の所為か大きな乱れは無く、瞬時に1体が駆ける突撃手へと向けて飛び掛る。

ランポスの飛び掛りは往々にして大きく弧を描くためほぼ着弾点のみが射程範囲になる。

そのため回避するためにはその場所から僅か体1個分、ずらすだけでいい。

しかし、その速度は非常に速く飛び掛ってくるのに反応して回避するのは困難だ。

突撃手たる彼はランポスが飛び掛るそのとき、むしろ飛び掛った後ですら回避行動をする気配が無い。

あゝ、とイリアが声をあげようとした刹那、彼の背に担いだ巨大な大剣を振り下ろし、飛び掛るランポスを豪快に叩き落とした。

体の半分を文字通り断ち切られ、更に地に叩きつけられた衝撃で関節がおかしな方向に曲がる。

振り下ろした大剣を走りやすいよう再び背に収め、彼がランポスの群れへと飛び込む。

後はもう一方的な惨殺。

彼の間合いに入った者は巨大な刃になすすべなく切り倒される。

叩きおろし、なぎ払い、切り上げ、さながら刃の暴風。

彼の死角から飛び掛るランポスは闇からの狙撃で彼に届く前に撃墜。砲撃手を狙ったランポスは言うまでも無く、ほとんど近づくと事すらできずに砲撃を浴び、脳髓をぶちまけキノコの育成に一役買う。

そして、イリアが漸く体を起こし、太刀を拾った頃には、辺りは青の屍と血の匂いで満ちていた。

まだ震える足に無理を言わせ、ゆるゆると立ち上がる。

崩れ落ちそうになる体を太刀を杖代わりにして支え、大剣に付いた血を振り払う突撃手 ジャックへと視線を向けた。

向こうも大剣を背に収め、イリアへと歩み寄る。

思わずうつむく。

彼の顔が見られない。

意見を聞かず、一人で飛び出し、拳句に死にそうになるところを助けられた。

悔やんでも悔やみきれない、後悔。

あの人の隣にいることを望み、それが現実となり、想像と違ったあの人に飽きれ、怒り、そして自らその場を離れた自分。

どれほどの罵倒を浴びせられるのか、想像もつかない。

足音が徐々に近くなり、そして直ぐ近くで止まる。

びくつと体が反応し、すくむ。

しかし、その後得た感触は想像していたものとは全く別物だった。

「ばん、と、自分の頭を二回なでられる。それだけ。

再び歩き出した足音は徐々に遠ざかって行き、それにつられるように上げた視線に移ったのは大きな背中だった。

不意に込み上げてくるものを必死に抑えようと歯を食いしばると、彼とはまた別の足音に気付きそちらへと視線を向ける。

正確無比な射撃を行っていた砲撃手、リズイがいつも通りの鉄面皮でイリアを見つめていた。

「バカ」

直球の一言に息をのむ。反論のしようも無い程に的確なその一言で声が出ない。

彼女の顔が見られない。イリアには俯くしか取れる行動が無かった。

「でも、無事でよかった」

その一言に勢いよく顔を上げる。

目の前にはリズイが差し出しているキツネ色の骨付き肉。

おずおずと手を伸ばし、肉を手取る。

焼き立てとは言い難く冷めている肉に歯を立てて、噛みちぎる。
おいしかった。本当に、本当においしかった。

普段食べ慣れているはずの、何の変哲もないただの肉だというのは、
今まで食べてきたどの肉よりも格段においしかった。

そこでもう、堪える事など出来るはずが無かった。

込み上げる感情は胸から瞳へと移り、雫となってこぼれおちる。

「ごめ、ごめ…なぞ…」

静寂の訪れた洞窟に、彼女の嗚咽は暫く響き続けた。

2章 (8)

イリアが落ち着きを取り戻した頃、ジャックとリズイもまた一仕事
終えていた。

降りしきる雨に超時間晒されていた事と、いつ襲われるか分からな
いと言う緊張感が加わり極度に疲弊していたキャラバンの一向に滋
養強壮効果のある元氣ドリニコを調合、配布していた。

体力の回復だけであれば肉でも食った方が効果が高いのだが、いき
なり固形物を口にする事は出来なかつたようだ。

依頼としては半分完了といったところか。

このままキャラバンと安全な場所へと避難させればほぼ完了と言っ
ていいだろう。

だが、消耗しきっている彼らを直ぐに移動させる事は出来ない。

暫くはこの場に留まる必要があるだろう。

彼らの周りにはいくつか火を起こしてある

密林に限らず、人の手が入って居ない場所はモンスターの領域だ。

本来であれば出来る限り避けたいところなのだが、これから密林を
抜けなければならぬ事を考えると、少しでも体を温めておかなけ
れば再び彼らの体力が持たないと判断した。

雨に晒されている森で薪になるものを探すのは中々大変なはずだが、
ジャックとリズイがちゃっかり探し出していた。

ハンター側の三人も起こした火にあたりながら、それぞれ武器の手
入れなどを行っている。

シャツシャツと音を立てながら砥石を滑らせるジャックが視線を落
したまま何気ない風に呟く。

「そーいやあのライトボウガンの音、なんだつたんだろっな」

「多分、あれ」

そういつてリズイが指さす方向には、焚き火の光に照らされたボウ
ガンが転がっていた。

「クックアンガー…多分、護衛ハンターの遺品」

ボウガンに関しては門外漢のジャックには分からないだろうが、商人が手にできるようなボウガンでは無い。しかし、周囲にハンターの姿が見えない事を考えれば、遺品と考えて間違いないだろう。

「最後の最後で役目を果たした、って事か。安らか…は無理だろうが、ゆっくり眠って欲しいもんだな」

「…ん」

再び、砥石が刃を滑る音のみが響く静寂が訪れる。

その静寂を断ち切る様に、未だ目は真つ赤だが取りあえず落ちつきを取り戻したイリアがおずおず、といった風に口を開いた。

「あの…師…ジャックさん。一つ聞いていいですか？」

「ん？なんだ？」

愛剣の刃を砥石で整えていたジャックが顔を上げる。

「あたしには…ジャックさんが考えてた事が分からないんです。捜索する場所を決めていなかったりとか、事前に相談していなかった事とか…」

「あ…あれはまあ、ちといつも通りにやり過ぎたな」

ポリポリと頬を搔いてはつの悪そうな顔。

「いつも通り…？」

「密林つてのはさ…あ、いや、密林に限った話じゃないが、人の手が入って無い場所つてのは、やっぱり未開の地であって、人の常識なんつーもんは通用しない場所なんだよ」

唐突にそう話出したジャックに、何の事なのかとイリアが首をかしげる。

「ハンターなんつーもんをやってる時点で、不慮の事態が起こる事はお前も理解してると思うけどさ、俺達はなんつーか…こう、ビビリなんだよ」

「…えつと？」

「ジャック、それじゃ意味わからないと思う」

「うつせえ。元々説明するのなんか得意じゃないんだよ」

洞窟内に転がっていたモンスターの背骨から薬莖になりそうなものを選別していたリズイが呆れたように呟き、ジャックが手に持っていた砥石を投げ捨てる。

「えーっと、だからな。実際に現地に立ってみて、状況を把握してからじゃないと方針を決めたくないんだわ。事前に色々と話をして方針を決めておくのも有りだろうが、実際に現地に行ってみたら予想していた状況とはまるで違う何て事は少なからずあるはずだ」

「もっと経験を積んで、どんな状況にも対応できる人なら別。でも私たちにはそこまでの実力は無い。だから、むやみに動く事はしたくない。ハンターは捨て石じゃない。私たちだって生きて帰りたい。私たちは、自分の命を最優先に考えている。それだけ」
何か思う事があったのか、珍しくリズイの口数が多い。

その通り、とでも言いたそうにうんうん、とうなづくジャックに、リズイが使い物にならなかつたらしい骨を投げつける。スコン、と音がしそうな程に見事に額にヒットして、ジャックがギャーギャーわめきたてる。まるで緊張感が無い。

そんな光景に、イリアは呆れとも侮蔑とも思える表情を浮かべていた。

「それじゃ…お二人はキャラバンの人がどうなっても良かったって言うんですか…？」

その言葉にぴたりと動きを止め、ジャックはイリアと視線を合わせた。

「何よりも優先にしなきゃならない、って意味だとしたら、イリアの言う通りだ。自分の命を投げ捨ててまで助ける必要があるとは思っていない」

「そんな！」

「だからといって見捨てても良いとは思ってない」

立ちあがるうとするイリアを制するように、多少早口に成りながらジャックが割り込む。

「そんなの…口だけじゃないですか…」

それでも納得がいけない様子のイリアにジャックは諦めにも似た表情を浮かべる。

イリアの目から見れば自分本位で他人の事はまるで考えていない様に見えるのだろう。

事実、今回の件に関しても先にこの場所にたどり着いたのはイリアであり、彼女の到着が早くなければキャラバンの一人二人はランポスの餌食になっていたかもしれない。

その事はジャックもリズイも理解してる。しかし自分達の判断は間違っていないと考えるのが二人だ。

平行線、交わる事が無い主張の差異。

そんなイリアの反応に対し、以外にも反発を覚えたのはリズイだった。

普段は鉄面皮と呼ばれているその表情に、明らかに怒りの色が見えていた。

「自分の目が全て正しいと考えるのは愚か者の考え。視野が狭すぎる」

「なっ……」

「リズイ、いいから」

「ダメ。ランポスを殺してキャラバンを救ったのは誰？肉すら受け付けなかったキャラバンに元氣ドリンクを用意したのは誰？雨に濡れた密林で乾いた薪を探してきたのは誰？」

「っ……」

「全て、貴方じゃない」

「で、でも！あたしが居なかったら、もしかしたら何人かは犠牲になっただけかもしれない！」

「私達が居なかったら全滅していた」

「リズイ、落ちつけ」

「五月蠅い。黙れ。貴方はジャックの何を見たの？何を知っているの？知りもしない事を自分の想像だけで語らないで。ジャックを口だけの男だと言うのなら、私は」

口早に告げるリズイがスウ…と目を細めた。

「許さない」

その視線に見詰められたイリアは咄嗟に焚き火から背を向ける。

背に走った寒気が未だインナーに残る雨水の所為だと言う事にして。

「あ、あたしは…あたしだって…」

うわ言のように呟く声に先程までの力はない。

項垂れ、肩を落としたイリアに、リズイは興味を無くしたかのように

視線を外し、再び背骨の選別へと戻った。

そんな二人の姿に、ジャックはヘルムを外した頭をガリガリと掻き

ながら大きなため息をついた。

完全な決別。

十人十色とは良く言ったもので、完全に意見が一致する事など無いと言っても良い。

長年ペアを組んできたジャックとリズイですら時として大きな意見の食い違いはあるものだ。

故に、多少の良い争いはあってしかるべき。

だが、今回に限っては何時もの事、と流せるレベルでは無い事は言わずともしれている。

ジャックとしては、イリアの人柄は 師匠になってくれというのは遠慮したいが 決して悪い印象では無かった。寧ろ、可愛い後輩という言葉がしっくり来る。

彼として師匠というのは柄でもないとは思っていたのだが、経験の浅いハンターに色々と教えていく、もしくは盗ませるといふのは悪くないと感じていた。

とはいえ、それも余裕がある時に限る話だ。

ここまでこじれてしまった人間関係で共に狩りをする事は不可能だろう。

たった1回の狩りで解散というのは少々寂しい気もするが、臨時のパーティーだったと思えば良い。

パチパチと焚き木が弾ける音のみが辺りを包み始めた時、トトトツ

という何かの駆ける音がジャックの耳に入ってきた。

2章 (9)

足音に咄嗟に立ちあがりながら大剣を構えるジャック。リズイも弄っていた背骨を投げ捨てて素早くジャックの後ろへと回る。

イリアも既に膝立ち状態で背の太刀の柄を握っていた。

取り乱したとはいえ、そこはまるっきりの新人というわけではないようだ。

焚き火の光がゆらゆらと照らす先をジツと見つめる三人。

足音は徐々に近くなり、やがてその姿を光の下に見せる事となった。

「にやあく、やっと見つけたニヤ」

三人の視界に入ってきたのは猫の様な姿をした獣人、アイルーであり、更にその顔を見たジャックは困惑した顔を浮かべた。

「コジロー？何でこんなところに居んだ？」

駆けてきたのはジャック達とは顔見知りとも言えるアイルーのコジロー。本来は捕獲した飛竜などの運搬を仕事としているはずの彼の登場に戸惑いを隠せない。

ジャック達の顔を見たコジローは一旦足を止め、雨の中を走ってきたらしいずぶぬれの全身を震わせて雨水を飛ばしてから、二足歩行で器用に焚き火の近くへと歩いてきた。

「ギルドからの緊急依頼ニヤ。全く、ハンターギルドもニヤー使いが荒いニヤ」

取りあえず足音が見知った人(?)だった事に構えた大剣を下ろしながら、コジローの言葉に眉をひそめる。

「緊急の依頼…？まあ、依頼は良いが、俺達はまだ引き受けた依頼を完了させて無いぞ」

「その辺は特別処置だそつだニヤ。ジャック達の依頼は完了したつて事にされるみたいニヤ」

「なんだそりゃ…そんな話聞いた事ねえぞ」

「それだけ緊急つて事だニヤ。細かい事はマリーアから手紙を預か

つてるから、それを見るニヤ」

濡れた体を乾かす様に焚き火に当たっているコジローが後腰部に取り付けたドングリ型のポーチから一通の手紙を出した。ポーチはしっかりと防水加工されているようで、手紙が滲んでしまっているような事もなさそうだ。

円柱状に丸めてある手紙はギルドの紋章と同じ模様の蠟で封をしてあった。

この手紙が書きとめられてから一度も封を開けられておらず、封をしたのはハンターギルドである、という証明にもなる蠟を剥がしながら羊皮紙のそれを広げた。

手紙は流暢な文字で一面にびっしりと書かれていた。

立ったままでは焚き火の光に影になってしまう為、焚き火を向いた状態で膝立ち状態になる。

ジャックの後ろに立っていたリズイは彼の肩越しに除きこむように手紙を見る。

その内容を確認したジャックは本人も気づかぬうちに眉間に皺をよせていた。

「……おいおい、これはなんの冗談だ？」

「冗談ニヤんかじゃニヤいニヤ。今のドータはかなりヤバイ状態だニヤ」

俄かに信じがたい内容ではあるが、これが本当だとしたら緊急事態というのも納得できる。

「…分かった、行こう」

「ん」

決断は即決で。

行くと答えるジャックに、リズイもまた疑問すら持たずに了解するが、

「ちょ、ちょっと待って下さい。行くって…キャラバンの人達はどうするつもりですか？」

やはり、と言うべきか、イリアはこれに納得がいかないようだ。

「その辺は心配しニヤくても大丈夫ニヤ。アンタ達の代わりのハンターがもう密林に入ってるニヤ。あ、そうだったニヤ。後から来るハンター達が分かる様に、適当ニヤところにペイントボール投げておいて欲しいニヤ」

ジャックが道具袋からペイントボールを取りだしている最中も、リアの表情は浮かない。

「それでも…途中で投げ出すのは嫌です」

「にゃあ…気持ちは分かるニヤ。でも、ギルドの方も万全を期す為に4人のハンターに来てもらってるニヤ。この意味、あんたも分かると思うけどニヤ？」

「それは…そうですが…」

一見無法者達の集まりにも見えるハンターギルドだが、人が集まればそこには必然的に規律が発生するものだ。

細かい規律は複数あるが、その中でもコジローの台詞に関連する規則は2つ。

一つ、ギルドは一つの依頼に対し、複数のハンターグループに依頼をしてはならない。

一つ、ハンターは5人以上のグループで行動してはならない。

前者は単純にダブルブッキングを防ぐための規則だが、後者に関しては諸説ある。

過去、ハンターギルドの創設者となる者達が複数人でグループを作っていたが、4人を残し全員無くなってしまった為4人以上は不吉だとされている…という俗説もあるが、世間一般的にそうだと言われている理由は別にある。

モンスターを獲物とするハンターは、その存在自体が既に強力な戦力だ。故に、反乱などの火種とならない様に、不必要に集まらせない様にしている、という物。

そんな事を考えているハンターなどそう居るものではないだろうが、

お偉いさん方はそうでもない様だ。

ともかく、そんな規則の所為でイリアが望む様には出来ない。

彼女が受けていたキャラバンの捜索、救出という依頼は既に果されたと言う事になっている。

またそれを引き継ぐ形で他のグループが同じくキャラバンの捜索、救出という依頼を受けている。

ここでイリアが依頼を継続したい、とした場合、キャラバンの捜索、救出という依頼が複数のグループにわたって依頼されてしまっている事となる。

では新しく依頼を受けたグループに途中参加という形で入るのは？
と言えば、最大4人までという人数制限に引っ掛かってしまう。
どちらにせよ、イリアはこの依頼を続ける事は出来ないと言う事になる。

「じゃ、じゃあ、その緊急の依頼を4人の方をお願いするのはどう
なんですか？」

「無理だニヤ。この依頼はジャックとリズィに名指しで来てるニヤ。
他の人は受けられないニヤ」

「えっ？お二人だけ…ですか？」
イリアの疑問への返答はある意味予想通りで、別の意味で予想外だった。

依頼が完了したとみなすなどという面倒な手続きをするほどという事は、どうしてもこの依頼は自分達に依頼したかったと言う事だろう。無理だ、と言われる事は想定範囲内。ダメ元で聞いてみたという状況が最も近い。

が、その後に追加された二人だけに依頼が来ていると言う点には面を食らった。

「そうだニヤ。ニヤーも依頼の内容は詳しくは聞いてニヤいけど、
伝えて欲しいと言われたのはジャックとリズィの二人だけだニヤ。
あんたの名前は出てこニヤかったニヤ」

「あたしじゃダメって事…ですか？じゃああたしはどうすれば…」

「にやあく。まあ、このままドータに戻るしかニヤいんじやニヤいかニヤ？」

他人事のように語るコジローにキツと強い視線を向けるも、対する彼は何処吹く風。雨露に濡れた顔をごしごしと洗う。

己の力不足はつい先ほど痛切に感じたばかりだ。

そのいらつきをコジローに向けたところで何も解決はしない事に気付き、肩を落とすイリア。

パシャツツという音に顔を上げるとジャックが足元にペイントボールを投げつけたところだった。

辺りにペイントボール特有の臭いが充満していく。

雨の所為で多少判別がしづらいかもしれないが、これで後続のハンター達も場所を特定する事が出来るだろう。

彼らが到着するまでの時間はそう長くはないはずだ。

その状況が彼女の決断を促したのは想像に難くない。

ぐっ、と唇を噛みしめて顔を上げるイリア。

「ジャックさん、リズイさん。あたしも連れて行ってもらえませんか？」

「話を聞いてニヤかったのかニヤ？ジャックとリズイだけって言うたはずだニヤ」

「貴方には聞いてないです」

顔の作りはまるつきり猫のアイルーだが、表情は人間と同じようにころころと変わる。

やれやれ、といった風に肩をすくめるコジローの表情には明らかな呆れの色が見えていた。

じっと視線を向けるイリアに対し、ジャックの返答は単純、且つ明確。

「ダメだな」

「…そうですね、分かりました」

思ったよりもあっけなく引いたイリアに、肩すかしを食らったように驚きの表情を浮かべるジャックだが、イリアとて一端のハンター

だ。先程の状態からして断られるであろうことは理解していたのかもしれない、と納得する事にする。

「決まったニヤらさっさと行くニヤ。あまりもたもたしてる余裕はニヤいニヤ」

「取りあえず代わりの連中が来るまではここに居るべきじゃねえか？」

代わりとなるハンター達がペイントボールの臭いをたどってここまで来るのは時間の問題だとは思われるが、流石に無防備なキャラバンをそのまま放置していくのは躊躇われる。

そう提案するジャックにリズイもコクンと頷くが、思わぬところから横やりが入る。

「お二人は先に行ってください。あたしがここに残ります」

そう告げるのは他でもない、あれだけキャラバンの安全を最優先を謳っていたイリアだ。

多少の違和感を感じるが、確かに3人残る必要性はあまりない。洞窟の大きさからして飛竜クラスは入れないだろうし、ランポス程度であれば本来のイリアならば 先程は不覚をとったが 十分に対処が出来るはずだ。

「…分かった。後は任せた」

次のハンター達が来るまで待ったところで半日も時間が掛るわけでもなく、タイムロスは微々たるものだ。だが、一刻を争う事態である事は間違いない。

イリアの提案を承諾し、ジャックとリズイの二人は洞窟を後にする。彼女の瞳にある種の決意の色があった事に気付かずに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3963q/>

モンスターハンター 火竜繚乱

2011年10月8日15時44分発行